



俳都松山

Haiku Capital Matsuyama

俳句ポスト365

2019-2020

作品集

<http://haikutown.jp/>



制作
松山市

俳都松山 俳句ポスト365 2019-2020 作品集

— 掲載回一覧 —

		投句募集期間	選句結果掲載日	投句数／投句人数
第213回	ていれぎ	2019/1/24 ～ 2019/2/6	2019/3/11 ～ 2019/3/15	6377 句 ／ 1265 人
第214回	かしわおち ば 柏 落葉	2019/2/7 ～ 2019/2/20	2019/3/25 ～ 2019/3/29	7072 句 ／ 1325 人
第215回	サイネリア	2019/2/21 ～ 2019/3/6	2019/4/8 ～ 2019/4/12	8249 句 ／ 1416 人
第216回	さくらだい 桜 鯛	2019/3/7 ～ 2019/3/20	2019/4/22 ～ 2019/4/26	7962 句 ／ 1442 人
第217回	みずでっぼう 水鉄砲	2019/3/21 ～ 2019/4/3	2019/5/20 ～ 2019/5/24	8402 句 ／ 1476 人
第218回	ひきがえる 蟱	2019/4/4 ～ 2019/4/17	2019/6/3 ～ 2019/6/7	8430 句 ／ 1523 人
第219回	けしぼうず 罌粟坊主	2019/4/18 ～ 2019/5/15	2019/6/17 ～ 2019/6/21	8842 句 ／ 1553 人
第220回	やまもも 楊梅	2019/5/16 ～ 2019/5/29	2019/7/1 ～ 2019/7/5	7679 句 ／ 1400 人
第221回	うつせみ 空蟬	2019/5/30 ～ 2019/6/12	2019/7/15 ～ 2019/7/19	9060 句 ／ 1579 人
第222回	はも 鱧	2019/6/13 ～ 2019/6/26	2019/7/29 ～ 2019/8/2	7461 句 ／ 1424 人
第223回	くつむし 轡 虫	2019/6/27 ～ 2019/7/10	2019/8/26 ～ 2019/8/30	7612 句 ／ 1409 人
第224回	あきばら 秋薔薇	2019/7/11 ～ 2019/7/24	2019/9/9 ～ 2019/9/13	8029 句 ／ 1457 人
第225回	たつたひめ 竜田姫	2019/7/25 ～ 2019/8/21	2019/9/23 ～ 2019/9/27	8341 句 ／ 1479 人
第226回	ちょうよう 重 陽	2019/8/22 ～ 2019/9/4	2019/10/7 ～ 2019/10/11	6931 句 ／ 1349 人
第227回	きのこ 茸	2019/9/5 ～ 2019/9/18	2019/10/21 ～ 2019/10/25	7961 句 ／ 1455 人
第228回	れもん 檸檬	2019/9/19 ～ 2019/10/2	2019/11/4 ～ 2019/11/8	8198 句 ／ 1541 人
第229回	はつふゆ 初冬	2019/10/3 ～ 2019/10/16	2019/11/18 ～ 2019/11/22	7945 句 ／ 1502 人
第230回	おちば 落葉	2019/10/17 ～ 2019/10/30	2019/12/2 ～ 2019/12/6	8250 句 ／ 1487 人
第231回	たらばがに 鱈場蟹	2019/10/31 ～ 2019/11/13	2019/12/16 ～ 2019/12/20	7291 句 ／ 1404 人
第232回	ゆきおんな 雪女	2019/11/14 ～ 2019/11/27	2020/1/13 ～ 2020/1/17	8342 句 ／ 1536 人
第233回	とうみん 冬眠	2019/11/28 ～ 2019/12/11	2020/1/27 ～ 2020/1/31	7439 句 ／ 1476 人
第234回	かんつばき 寒椿	2019/12/12 ～ 2020/1/8	2020/2/10 ～ 2020/2/14	8936 句 ／ 1774 人
第235回	むぎふみ 麦踏	2020/1/9 ～ 2020/1/22	2020/2/24 ～ 2020/2/28	7965 句 ／ 1529 人

ていれぎ

《春》アブラナ科の多年草。「ていれぎ」は愛媛県松山地方での呼び名で、正式名称は「大葉種漬花」。清流のほとりなどに生え、辛みのある若芽は刺身のつまなどにされる。3〜5月頃、茎の頂に白い十字状の花が咲く。

天

わがはいはネコでこのくさはていれぎ

高橋無垢

「ていれぎ」はアブラナ科の多年草。おおは たねつけはな 大葉種漬花が正式な名前ですが、松山ではもっぱら「ていれぎ」と呼ばれています。松山の天然記念物でもあります。俳人宮坂静生さんが提唱する「地貌季語」の一つ。これが兼題として出され、困惑した人たちも多かったはずです。松山らしさをどう出すかの一手として、夏目漱石著『我が輩は猫である』の一節を拝借。「わがはいはネコで」となりきっているのが面白い。小説の中の「ネコ」も英語教師として松山に赴任した漱石も「ていれぎ」は知らなかったに違いないという正直な思い。そんな困惑と共感を「わがはいはネコで」あって「このくさはていれぎ」であるという詩的定義で表現した発想が愉快な作品です。

地

御杖より種こぼれけむていれぎは

ひでやん

松山らしさを表現するために、弘法大師つまり空海のイメージを取り合わせる、という発想もありました。お遍路さんの持つ杖も「御杖」と呼びますが、この句の「御杖」は空海の杖。空海が杖を突いたところから湧き水が溢れてきたという伝説は各地にあります。この湧き水を、弘法水とも呼びます。水を湧き出させた「御杖」から「種」がこ

ぼれて「ていれぎ」が生まれたに違いないという一句。「けむ」という推量、「ていれぎは」のあとの余白など、巧い作品です。

ていれぎや眼を明るうす独鈷水

富山の露玉

「独鈷水」は「とつこすい・どつこすい・どつこんすい・おこづい」など様々な読み方があるようです。空海が「独鈷（仏具の一種）」を使って水を湧き出させたという伝説に由来します。清らかな水に群生する「ていれぎ」。まるで「眼」を明るくするかのように湧き上がる「独鈷水」が育くむ美しい緑です。

ていれぎや町ごとマッチ箱のやう

ヒカリゴケ

松山らしさを表現するために「町」の印象を取り合わせる発想もありました。「マッチ箱のやう」とは、夏目漱石が松山に赴任した時、「マッチ箱のような汽車」が走っていたと表現したところから引用したものの、「町」そのものが「マッチ箱」のようだとはいかに松山らしい表現です。今もお城を中心にまとまっている、暮らしやすい町です。

ていれぎや出べそのようなお城山

檜の木

松山の町を俯瞰すると、真ん中に「お城山」が在ります。「出べそのような」という比喩がいかに楽しい作品。まるで日本昔話のような味わいの比喩です。こんな「お城山」が見える水辺に「ていれぎ」はすくすく育つのです。

ていれぎの諱のなんと長きこと

地球人

「諱」いみなとは、身分の高い人の実名。つまり「ていれぎ」の本名である「大葉種漬花」を「諱」であると比喩したわけですから、二つの名前のギャップを「諱のなんと長きこと」と洒落ている。ふふっと笑える一句です。

ていれぎのいかにもたのしさうな位置

蟻馬次朗

湧き水に生えている「ていれぎ」が「たのしさう」に揺れているのでしょう。その様子を「いかにもたのしさうな位置」に生えているよ、と捉えた点に俳人の目と心が感じとれます。湧き水のひかり、「ていれぎ」の動きもありありと見えてきます。

ていれぎや貧しき水の清らなれ

佟月子

「貧しき水」とは、慎ましかかな湧き水と読んでもよいですし、貧しきものたちの抛り所となっていた水だとイメージを広げることもできます。今でこそ松山の天然記念物だと喜ばれていますが、「ていれぎ」を沢山摘み取って貧しい食卓の一品とした時代もありました。「貧しき水の清らなれ」に思いが溢れます。

ていれぎや川の鼻には棲む勿れ

めいおう星

「川の鼻」とは、流れに向かって鼻のようにせり出している土地のこと。「水量が増えると簡単に水に吞まれる地形です」と作者からのコメントも添えられていました。「住む」ではなく「棲む」ですから、そこに潜む生き物や川辺に育つ「ていれぎ」のことまでも思いやっているかのような心情が感じとれます。川の鼻にすんではいけない、という古老の言葉のような「棲む勿れ」という措辞です。

こんな水では死ぬていれぎも我も

雪うさぎ

「こんな水」としか述べてないのですが、「死ぬ」の一語が読み手の胸を打ちます。「こんな水」になっちゃったら「ていれぎ」が絶滅してしまうではないか。そんな水を飲んで「我も」また同じではないか。環境への思いが切実な一句になりました。同時投句「ていれぎを食べて愛比売を身籠りぬ」も魅力的な作品です。

ていれぎを知る新宿のホストかな 油揚げ多喰身

「新宿」という地名を入れつつ、ちゃんと松山を感じさせる発想に脱帽。「新宿」のクラブで「ていれぎ」の話題がでたのでしよう。「ホスト」の一人が、僕知ってますよ、子ども頃に刺身のツマに添えられて、でも子どもの舌には辛くて、なんて語ったのかもしれませんが。小さなドラマがパッキングされている作品。

第214回 2019年3月25日週掲載

かしわおちば

柏落葉

《春》 柏は主に山地に生えるフナ科の落葉高木で、高さは10〜15mにもなる。秋に枯れた葉は枝に付いたまま冬を越し、春に落葉する。

天

柏落葉さて殿か魁か

大塚迷路

「柏落葉」は春の季語か、夏の季語か。年代によって歳時記にブレがあるようですが、枯れた状態で枝に残って冬を越し、新しい芽が萌えだして落葉するのが季語の特徴であることは変わりません。そんな季語の本意をこんなにもシンプルな言葉で表現した一句。「殿」とは隊列や順番の最後を、「魁」とは全体の先頭に立つことを意味します。作者は「柏落葉」の降り積もった場所に佇んでいるのでしょうか。手にした落葉は、次代への命の引き継ぎを全て見届けて落ちたものか、はたまた先頭を切って身を投じたものか。しみじみと眺める作者の心に去來したであろう感情に共感を覚えます。「殿」「魁」の文字が「柏落葉」の格調とも相俟つての作品です。

地

かしはおちばのらふたけてひかること あかしの小桃

「らふたけて」は漢字で書くと「膾長けて」。洗練されている、優美であるという意味の他に、その道の経験を積む、年功を積むという意味もあります。「かしはおちば」の特徴を「らふたけて」と述べ、さらに「ひかること」と描写する。このあたりの言葉選びが実に手慣れています。

ごく稀に美品の柏落葉かな

さとけん

一気に落ちる「柏落葉」は、人々に踏み壊されているものがほとんど。でも時々「美品」もあるなあと感じながら観察しているのは、俳人ならではの視点です。「ごく稀に」は一見散文的ですが、そこに作者の実感が読み取れる作品です。

かしはおちばや天金は黒ずみぬ たんじえりん金子

「天金」とは、書物の製本で上方の小口だけに金箔をつけたもの。美術品みたいに凝った装丁の本を想像しました。季語「かしはおちば」を強調し、後半は「天金は黒ずみぬ」と取り合われます。古りてゆくものの味わいが、取り合わせの接点。「黒ずみぬ」と述べつつ、汚くはない。その格調が「天金」の本であり、柏落葉という季語の本意でもあります。

柏落葉や祖母の手がこわかった

つぎがい

「祖母の手がこわかった」は、凄まじい皺の様子なのか。はたまた、お行儀が悪いとパシッと叩かれた手なのか。どちらの読みをしたとしても、上五「柏落葉」は動かない季語としてどしりと一音を続けます。

老ゆる母の舌はおそろし柏落葉

凡鑽

こちらは「母」です。「老ゆる母」は「柏落葉」の存在と

近いような気もするのですが、中七の措辞に戦きました。「舌はおそろし」とは、部位としての衰えた「舌」の形状でしうか。その「舌」から発せられる言葉でしうか。はたまた衰えることを知らない「舌」＝味に対する精度かもしれない。「おそろし」という言葉の多義性を巧く使いこなした作品です。

啼くやうに斜陽が柏落葉まで

倉木はじめ

「啼くやうに」という比喩から始まる一句。「斜陽」つまり夕日の傾いていく様子をどのように捉えたところに詩があります。「斜陽」のどごく先には「柏落葉」が降り積もっている。その光景もまた「啼くやうに」も感じられます。

仏性や柏落葉に水の綺羅

めいおう星

上五「仏性や」は大胆な入り方です。仏としての性質、仏の本性を「仏性」といいますが、仏のように慈悲深い性質にも使います。「柏落葉」という存在を慈悲深く捉えていると読んでもよいですし、「柏落葉」に仏の性質を感じ取っているとも読めます。いずれにしても最後の「水の綺羅」という五音で、水に落ちてゆく「柏落葉」を映像として描いている点が見事な作品です。

湖心まで柏落葉の舟出ます

ときい

こちらは湖の畔の「柏落葉」です。水際に落ちた葉がひたひたと揺られて岸を離れていきます。葉っぱを「舟」と比喩する発想はありますが、好感のもてる語りです。「湖心まで舟出ます」という口語表現が絵本のような味わいです。

オウムガイの知恵柏落葉の知恵

いさな歌鈴

生きている化石とも呼ばれる「オウムガイ」。気の遠くなるような歲月、命を繋げてきた生物ですから、それなりの「知恵」というものがあるのでしょうか。「オウムガイ」にはオウ

ムガイの、「柏落葉」には柏落葉の「知恵」があるのだなあとこの感慨は、今回の兼題に取り組んでの、作者の正直な感想でもあるのでしょう。対句表現を巧く使いつつ、二つのモノの取り合わせの妙も楽しませてもらいました。

第215回 2019年4月8日週掲載

サイネリア

《春》キク科の多年草。草丈30cm程で、葉の形は薔に似たハート型。花の色は紅、白、紫など様々である。本来「シネラリア」という名だが、縁起を担いで読み換えられたとも、ラテン名の英語読みであるとも言われる。

天

サイネリアなんにもない日おめでたう かのたま

デイズニ映画『不思議の国のアリス』の「お誕生日じゃない日のうた」の歌詞「なんでもない日おめでとつ」を本歌取りした一句。「なんでもない日」ではなく「なんにもない日」ともじっているのです。今日の予定がない自由な一日でしょうか。いやいや、家族や恋人がいらない、お金や食べ物がない、生きる目的を見失っていると読むことだってできます。平凡な日常のシアワセか、絶望の果てに見つけた希望かそこにあるのは一鉢の「サイネリア」。喜びが手を開いてかたまつて咲いているような「サイネリア」を見てみると、何もかもがきらきらしてくるような気がします。自分を励ます「おめでたつ」もきらきらしています。「一緒に歌いたくなります」

地

サイネリア例の天使と目が合った

大塚迷路

「例の天使」というのですから、作者にはこの「天使」がしばらく前から見えているのですね。「サイネリア」の傍ら

に「天使」が立っているのに、どうも誰にも見えてないらしい。なぜ自分にだけ見えているのかは分からないが、時折現れる「天使」。そして今日はなんと「目が合った」のだ！「サイネリア」の元々の名は「シネラリア」。日本語の「死ね」が連想されるので、呼び名を変えらてしまったというエピソードをもつ植物。「サイネリア」の傍らの「天使」は福音の天使か、明るく死を告げる使者か。「サイネリア」はあくまでも色鮮やかに咲き広がります。これも「天」に推したかった作品です。

窓に空詰めてリボンはサイネリア

克巳

「窓」いっぱいに見えるのは「空」。それを、窓に空を詰めていると表現。さらに窓辺に置いた「サイネリア」を「リボン」に見立てました。比喻と見立てを併用するのは難しいのですが、季語「サイネリア」とのバランスがいいですね。

サイネリア枯れる失恋とは違ふ

朱河

うっかり「サイネリア」を枯らせてしまった。水やりを怠ってしまっていた、その愁いは「失恋」ではないのだけれど、だって恋すらしないのだけれど、この感情をどう表現すればいいのか。ただただ枯れた「サイネリア」を眺めているのです。

サイネリア母は再婚くりかへし

多々良海月

鮮やかな色、賑やかな咲き方、花を咲かせる時期も長い「サイネリア」。何度も何度も恋をしてしまう女は、「再婚」を何度も繰り返すのです。そんな女が「母」であるよ、という眩き。まるで「サイネリア」のような「母」へのささやかな愛憎が匂います。

サイネリアほらラザーニャはすぐ焦げる あいだほ

「サイネリア」と「ラザーニャ」、二つのカタカナ語の取り合わせが軽やかで、豊か。「サイネリア」の視覚、「ラザーニャ」

の味覚、「すぐ焦げる」は嗅覚も刺激します。「ほら」という呼びかけに臨場感があります。

サイネリアは影も明るしエビピラフ

神山刻

こちらは「サイネリア」と「エビピラフ」。ちょっとミスマッチのような気もしますが、中七の季語についての描写が、全体のバランスをとっています。「サイネリア」は明るい花だけれど、「影も明るし」と感じる。そのかたわらの「エビピラフ」の色合いも見えてきます。おしやれで美味しいピラフです。

サイネリアなんとキレイに黄色5号

くさ

調べてみると「サイネリア」は、濃い黄色とオレンジ以外はほとんどの花色が揃っている」とあります。しかもこの「黄色5号」とは、人工着色料の名。「サイネリア」の色は天然のもの。「黄色5号」はこんなに「キレイ」な色なのに人工のもの。「なんとキレイに」に微量の皮肉も読み取れます。

サイネリアのめまい耳石ゆらゆらす じゃすみん

五七五の調べを破り、全部足すと十七音になるという破調の一句。「サイネリア」の多彩な色の渦に、「めまい」を覚えてしまうというのです。「耳石」は、石という字がありますが、実は細かなパウダーのようなものなのだそうです。「ゆらゆら」というオノマトペは、ゆらゆら動くのではなく、ゆらゆら漂う感じなのでしょう。

除光液の臭ひの隅にサイネリア

トボル

マニキュアを落とすための除光液でしょう。「除光液の臭ひ」と「サイネリア」、ツンとくる臭いと鮮やかな色あい、嗅覚と視覚の取り合わせです。中七「臭ひの隅に」という表現が巧いですね。臭いの隅に「サイネリア」の鉢が見えてきます。

シネラリア夜のシュレッターが怖い めいおう星

「サイネリア」の正式な名称は「シネラリア」。日本語の「死ぬ」に通じると嫌われて改名された「サイネリア」。会社の残業でしょうか、自宅の「シュレッター」でしょうか。紙を食って唸りだす音を「怖い」といつているのか、手が吸い込まれたらという生々しい妄想による「怖い」か。「夜」の「サイネリア」は無表情に鮮やか。それもまた「怖い」。

五年後の水買ふ白きシネラリア

どこかいて

こちら「シネラリア」の一句。「五年後の水」とは、賞味期限が五年という意味に解釈しました。防災グッズとして準備しているリットル入りのペットボトル。「五年後の水」と「白いシネラリア」。どちらも静かに、そこに置かれています。

殺戮は地図へ記せずサイネリア

内藤羊卓

国ごとに色分けされた「地図」を眺めているのでしょうか。様々な国の存在を思う時、「殺戮」という言葉が浮かんできたのでしょうか。「殺戮」の歴史は「地図」には記せない。北アフリカのカナリア諸島が原産の「サイネリア」は、品種改良を重ねながら世界に広がり、世界中の人々から愛される花となりました。「サイネリア」の鉢と一枚の「地図」から、こんなふうに歴史に思いを馳せる句もあってよいと思います。

第216回 2019年4月22日週掲載

さくらだ い

桜鯛

《春》桜の季節に、内海に卵を産むために集まってくる真鯛のこと。加えて、生殖時期になると雄の腹が赤くなることも呼び名の由来となっている。

天

桜鯛にしてこんなにも粗末な歯

蟻馬次朗

子どもの頃の楽しみの一つが鯛を釣ることでした。伝馬船を漕ぎ釣りをしていた私にとって、鯛の歯とは鋭いものだという思いがあります。鯛は雑食性でエビやカニなどの甲殻類を好みます。鋭い歯は硬い殻を噛み砕くためのものなのです。

が、「こんなにも粗末な歯」にも覚えがあります。それは、活き作りや塩焼きとなって皿に置かれた「桜鯛」を眺める時です。幾度となく釣り糸を切られた悔しい思いがある歯なのに、料理されてしまうと「こんなにも粗末な歯」に見えてしまう。「桜鯛にして」という措辞は「桜鯛」の美しさ目出度さを、「こんなにも」は「粗末な歯」に気づいてのギャップを率直に呟いて愉快。この句を読んだ皆さんは、今度「桜鯛」の尾頭付きに遭遇したら、マジマジと鯛の口をのぞき込むだろうなあ(笑)。

地

桜鯛村は総出の神事なる

岸れん

「村」が「総出」となっている「神事」とは、春祭りの類でしょうか。村総代の指図で、これぞという立派な「桜鯛」も調達済み。村の鎮守の神様に捧げる三万の上に飾られた「桜鯛」の尾びれも見えてきます。

桜鯛海神様は上機嫌

GONZA

今日はなんと見事な「桜鯛」が次々に揚がってくるのか！これはきつと「海神様」が「上機嫌」なのだろう。「桜」の一字が、陸地に広がる桜も想像させ、「海神様」の「上機嫌」をさらにかき立てるかのよう。

桜鯛の海や朝鮮通信使

小倉あんこ

「朝鮮通信使」とは、室町時代以後、朝鮮国王が日本に派遣した使節の名称です。この一行が立ち寄っていたのが広島県鞆の浦。まさに「桜鯛の海」です。かつて「朝鮮」からやってきた人たちも、この浦の「桜鯛」を振る舞われていたに違い。時代を繋ぐ「桜鯛」です。

金色に老ゆる空なり桜鯛

一阿蘇鷺二

「金色に老ゆる空」とはどういう意味でしょう。一日を一生とすれば、金色に暮れてゆく空でしょうし、「老ゆる」に作者の心情が託されているのであれば「金色」の充実感を含んだ懈怠かもしれません。「なり」と言い切った後の「桜鯛」への切り替えが巧い一句。

射抜かれた扇は空へ桜鯛

中山月波

平家物語の世界へ発想を飛ばした一句。主人公は那須与一。よびいてひょうと放たれる矢が「扇」を射抜きます。「扇は空へ」という視線の先には「桜鯛」の海。これもまた「桜鯛」という季語が時代を繋ぎます。

桜鯛翻筋斗打つて魯山人

めいおう星

「翻筋斗」は「もんどり」です。「桜鯛」がもんどり打って跳ねる。その先にあるのは「魯山人」の器なのでしょう。「翻筋斗」という文字の面白さ。活きて跳ねる「桜鯛」が一気に料理されてしまうかのような展開の愉快。さすがの一句です。

八勝に金星二つ桜鯛

くりでん

「八勝」は勝ち越しの数。その中には横綱を倒した「金星」も一つ。充実した場所です。春場所が終わった安堵とお祝いの「桜鯛」。来場所への期待がかかります。「金」と「桜」の合いも目出度い。

先生はだんだん小さく桜鯛

すかんぼ

何年かに一度ひらかれる同窓会でしょうか。あんなに怖かった「先生」なのに「だんだん小さく」なられてという感慨卓に饗された「桜鯛」を穏やかに目を細めて眺めておられる「先生」も見えてくるよう。そういう自分たちも、先生と同様の歳月を老いているのだなあとという思いも垣間見えます。

桜鯛ケの日は凡そオロオロし

七瀬ゆきこ

「桜鯛」はハレの食べ物というイメージがありますが、「ケの日」は「凡そオロオロし」て暮らしている自分をからかっているのか。「オロオロ」に宮沢賢治の詩のイメージも重なってきて、二重に楽しませてもらった作品です。

人様の佳き日たいくつ桜鯛 小泉ミネルヴァ岩魚

「人様の佳き日」を言祝ぐために集まっているのだけれど、なんとも「たいくつ」を持て余しているという正直さが好き。テーブル上の「桜鯛」も同じように「たいくつ」な目つきで飾られているのでしょう。

結婚は二度目がよろし桜鯛

あまぶー

己の身に引き寄せて言うのもなんですが、「結婚は二度目がよろし」という経験もまた有り難いことです。「桜鯛」で祝うのも恐縮ですが、「よろし」の感謝を胸に、初老の再婚を謳歌している六十二歳のワタクシ。

第217回 2019年5月20日掲載

みずでつぽう

水鉄砲

《夏》子どもの水遊びの玩具の一つ。竹筒で作ったものから、鉄砲型のプラスチック製のものまで様々。

天

影の持つ水鉄砲も透きとほる

かのたま

「影」とは「水鉄砲」を持っている人物の影です。一句の世界に存在しているのは水鉄砲を持った人とその「影」のみです。手にしているのは、透明あるいは半透明の素材でできたスケルトンの「水鉄砲」。夏の太陽光線は「水鉄砲」を突き抜け、水はゆらゆらと光を弾いています。ポイントとなるのは、「影の持つ水鉄砲も」の「も」です。この助詞は、手にしている「水鉄砲」も透き通っているけれど、「水鉄砲」の影も透き通っていることへの気づきを表現しています。「影」として立つ人物は「水鉄砲」を撃とうと構えているのか、はたまた撃たれた一瞬の放心か。賑やかで元気な印象の強い「水鉄砲」ですが、不思議な静寂もまたこの作品の大きな魅力です。

地

二学期を撃ちて押し遣る水鉄砲

蜂里ななつ

長い夏休みもいつかは終わります。やってくるな二学期！と叫ぶかのように撃つ「水鉄砲」。動詞の多用は、一句の世界がドタバタしがちになるのですが、この場合の中七「撃ちて押し遣る」は巧いですね。「撃ちて」は実際の動作、「押し遣る」は心情。このあたりの配分が成功した理由です。

にいちちゃんのあれは水でつぽうなのか さとけん

最近、とんでもないほど大きくて強力な「水でつぽう」が売られているようです。「にいちちゃん」の手にしている「あれ」は、僕の持つ小さな水鉄砲に比べると、あまりにも強烈。「あれは水でつぽうなのか」という台詞のリアリテイに思わず笑ってしまいました。防戦一方の弟は、もうビショビショに濡れているでしょう。

百均の水鉄砲最強説

でらつくま

イマドキの凄い水鉄砲は確かに強力だけど、一度水が無くなったら給水に時間がかかるし、水タンク背負つてると動きが鈍くなるし、すぐ壊れたりもするし。結局「百均の水鉄砲」が一番使いやすいし、強いんだよ、なんて話してるのでしょうか。「最強説」は果たして事実が否か。試してみたいですね(笑)。

落つるまで水みずみずし水鉄砲

中岡秀次

「落つるまで」の「水」はいかにも「みずみずし」であるのが「水鉄砲」というものなのだ、という詩的定義が率直に見事。「水」が押し出される力を保っているうちは、光りもし弾みもするのです。最後に答えとして季語「水鉄砲」が出てくる語順も効果的です。

水鉄砲の弾倉に死んだ水

三重丸

遊び終わった後の「水鉄砲」でしょう。その「弾倉」に残っているのは「死んだ水」だということです。飛ばない水は、光らない水、弾まない水なのです。「死んだ水」という詩的断定に力があります。やがてその「水」は静かに腐臭を放ち始めるのです。

アフリカいろの水鉄砲デカイ

きゅうもん@木ノ芽

「アフリカいろ」は、アフリカの国々の国旗のような色合いを思いました。たぶんイマドキの武器めいた「水鉄砲」なのでしょう。最後の「デカイ」の一語が、実に痛快な作品です。自由律のリズムもこの句の内容に似合っています。

水鉄砲あのごろ盥は海でした

山内彩月

「水鉄砲」の後の「あのごろ」はいつ頃なのか曖昧ですが、後半「盥は海でした」によって明確になります。盥で水遊

びをしていた幼い頃。それを振り返っているのかもしれないが、「水鉄砲」を手に目の前の「盤」で遊んでいる子を眺めながらの感慨かもしれません。

水鉄砲に撃たれ今夜は宿題無理

千恵

楽しすぎて、ぐったりと疲れての言い訳ではありませんが、昼間の「水鉄砲」遊びの楽しさが存分に伝わってくる一句です。「水鉄砲撃たれ今夜は」とうした？と思った瞬間の「宿題無理」の一言が、ある意味あつぱれな言い放ちよう。ほほえましくも可愛い一句です。

水鉄砲あいつアメリカいるってよ

風舎哲坊

会話しているのは二人。季語「水鉄砲」によつて、この二人は幼なじみ、あるいは同級生ではないかと想像されます。近況報告が一段落して、あ、そういえば「あいつアメリカいるってよ」と呟かれて、ハツとする。「あいつ」はかつてのライバルか、心せずして傷つけてしまった友人か、恋人か。この一句だけで十本の短編小説が書いてしまいそうな幅があります。これも「天」に推したかった作品です。

第218回 2019年6月3日週掲載

墓

ひきがえる

《夏》 ヒキガエル科の体長約12cmの大型の蛙。暗褐色または黄褐色で、背中にいぼがあり、眼の後方の耳腺からは有毒の分泌液を出す。

天

墓家族は母のモノでした

おんちゃん。

なんと切ない句でしょう。「母」は精一杯みなのことを考え、ふるまっていたのでしょうか、専制的かつ感情的な母親に

振り回される「家族」の憤りと諦めと切なさで静かに嘖き出してくるような作品です。「一見、疣のある醜い「墓」に「母」という存在を重ねているだけに読めますが、実は切なく美しい声で鳴くのが「墓」という生き物。母親には母親なりの信念と偏愛があるからこそ「筋縄ではいかないのです。「家族は母のモノでした」呟きのような詩語が示唆する悲しみの質量が読者の胸にひたひたと押し寄せます。俳句という文芸が持つ眩暈のするような奥行を突きつけられた心持がします。「墓」は動かし難く、季語としての存在感を放っています。

地

墓鳴くや墓と気づかれないやうに

あみま

「墓」の鳴き声を勘違いしている俳人は意外と多いのです。低い声でブオーブオー鳴いているのは牛蛙。「墓」は、か細く美しい声で鳴きます。初めて「墓」の声を「墓」だと認識して以来、水原秋桜子の「墓ないて唐招提寺春いづこ」が名句であることを、強く実感した次第です。醜い疣を持つた「墓」は「墓と気づかれないやうに」あの美しい声で鳴いているのだという発想。まさに「墓」ならではの一句です。

墓鳴けば空うらがえるうらがえる あるきしちはる

「墓」の鳴き声をこんなふうに聞きとめる人もいます。透き通った高音の美しい声が響いてくると「空」は「うらがえる」かのようだということです。「うらがえるうらがえる」のリフレインの音そのものも美しく感じられます。

墓さして遠くもなき故郷

る・こんと

「墓」を眺めているのか、鳴き声を聞いているのか。「故郷」を思うこともあるけど、帰ろうと思つてもなく。「さして遠くもなき故郷」という措辞は、作者の心理的な距離感をうまく表現しています。「墓」の声に乾いた望郷の念が重なり

ります。

女湯に女居るらし墓

あいだほ

男湯にポツンと一人が入っているでしょう。壁を隔てているとはいえ、「女湯」の桶の音や湯を流す音が聞こえてくるのです。勿論、露天風呂を思ってもよいですね。「女湯に女居るらし」は呟きであり、状況を的確に語る措辞でもあります。「墓」の声もほのほのと聞こえてきます。

「犬捨てるべからず」の沼墓交む

あまぶー

「犬捨てるべからず」という看板が立っている「沼」です。こんなところに仔犬を捨てるのでしょうか。ひよっとして死んだ犬を捨てにくる「沼」かもしれないと思うと、「沼」の色や臭いまで変わってきます。そんな「沼」で交尾している「墓」が二匹。生死の不条理を見せつけられているような気もしてきました。

田の水は濁りて清し墓

中岡秀次

「田の水」を張っている頃の光景を思います。田植えの準備として耕運機が耕す「田」。そこに水が張られると、一旦は濁った田となりますがやがて少しずつ澄んでいきます。「田の水は濁りて清し」は、一時期の状況を述べつつ、「田」というモノの本質も語る措辞。そんな光景の中で「墓」も己の居場所を見つけ、生きているのです。

疣のうちに線量ぎり墓蛙

なみはやらるる

「疣」の中には「線量」が「ぎり」と詰まっているのだということです。原発事故の影響下にあった「墓蛙」の体内を、こんなふうに想像していることに驚きます。「墓蛙」たちの生きて在る切なさが「ぎり」というオノマトペに詰まっているかのようです。

墓鳴いて月がさびさび欠けてゆく

にゃん

「月」にはウサギではなく「墓」がいるのだと見る民族もあるようです。「墓」の、あの悲しい子犬のような声は、まさに「月」を「さびさび」と欠けさせていくかのよう。この句のオノマトペにも真実と詩があります。

バーボンの滓のかく濃し墓

としなり

「バーボン」を熟成させる樽に残る「滓」。それを私は実際に見たことはないのですが、「かく濃し」という措辞に説得力があります。その「澱」はまるで「墓」の皮膚のような色をしていて、その味は「墓」の声のように香いのです。

墓湿りてほのか火の匂ふ

ヒカリゴケ

「墓」が湿っているのは当たり前なのですが、「ほのか」に「火」が「匂ふ」かのような感覚に、不思議な共感を覚えます。勿論、この「火の匂ふ」は、「墓」とは関係なくどこかで火を燃やしている匂いがしていると解釈してもよいですが、「墓」という生き物の属性に「火」というものがあるような気がしてならないのです。

引き算も苦手墓も苦手

いつき組リスナー 班 旧重信のタイガース

「引き算」の「ひき」「墓」の「ひき」の音を楽しむ一句。どちらも「苦手」なのと、はにかむ子どもでしょうか。親の吹きでしょうか。自身の子ども時代を思い返しているかと読んでもいいですね。こんな子いるよねーという共感の一句。

猫の墓から墓のまさか

花屋

実際にありそうなことから、しょうがないというか、怖ろしいというか。「墓」「墓」を重ねた句も幾つかあります。

したが、字面の面白さだけに終わってないのがこの作品。最後の「まさか」という終わり方が実に巧みです。破調も、句の内容に似合っています。

みづいろはかなしきいろよひきがへる ほろろ。

なぜ「ひきがへる」は「みづいろ」ではないのでしょうか。この「ひきがへる」は美しい水色に生まれたかったのかもしれませんが。神様が、せめてと、彼らの声をあんな美しいものにしてくれたのかもしれない。切ない絵本のような作品です。

第219回 2019年6月17日週掲載

罌粟坊主

けしぼうず

《夏》一日花である罌粟の花が散った後につける楕円形の実。熟すと黄土色になり、振ると種の音がするようになる。

天

罌粟坊主ひと殴ることなき拳

かもん丸茶

風に揺れる「罌粟坊主」は可愛いのに、毒にも薬にもなる「罌粟坊主」であるというのがこの季語の特徴。不穏な気配もします。

「罌粟坊主」を「拳」に喩える句はありますが、「ひと殴ることなき拳」との取り合わせにハッとしました。我が「拳」で人を殴ることは無いだろうと私たちは平穩に暮らしています。が、この社会において人生において「ひと」を殴りたい衝動にかられる出来事が起こりえないとは断言できません。折しも、香港の若者たちの百万人デモのニュース映像が流れています。抗議のために突き上げられる彼らの「拳」は強い憤りと怒りによって「ひと殴る」ものになりかねない。「罌粟坊主」のように揺れる「拳」が心から離れません。

地

罌粟坊主もののけの子も産めそうな 藤郷源一朗

「罌粟坊主」の産毛を眺めていると「もののけの子」が産まれてくるのではないかと、思えてきたのです。「もののけの子も産めそうな」という措辞には、それ以外に何者かも産んでしまうのではないかという思いも伝えます。美しくて妖しい何者かを。

罌粟坊主潰す喉仏のように 綱長井ハツオ

あの「罌粟坊主」を我が指で潰したとしたり、どんな感触なんだろうと想像したのでしょうか。「喉仏のように」は形状からの発想でしょうが、我が指に潰したこともない「喉仏」の感触と痛みが再生されていくような虚の実感のある作品です。

罌粟坊主のこの硬さを憶えてゐたい とおと

これも「罌粟坊主」を指で潰してみた感触でしょうか。もっと柔らかいかと思っていたのに「この硬さ」は一体なんだ？と。潰したことはないのに、「この」指の感触を感じたかのような虚の追体験。美しさと妖しさとを併せ持つ「罌粟坊主」ならではの感触でしょう。

けしぼうずけらけら鉄臭きフェンス いかちゃん

「けしぼうず」は「フェンス」の向こう側に咲き広がっています。こちら側をからかうかのように「けらけら」と風に揺れているのです。「鉄臭き」は「フェンス」の錆の臭いでありつつ、「けらけら」笑う「けしぼうず」の不穏な匂いのようでもあります。

「こいら」の通貨はルピー 罌粟坊主 小川めぐる

「ルピー」はインドの通貨。1ルピーは約2円なのだそうです。「こいら」では禁止されることもなく罌粟の花が咲き広がり、「罌粟坊主」が揺れているのでしょうか。違法な取引が行われているのではないかと憶測させるような取り合わせが、巧みな一句。

一葉の質草は筆けしぼうず よしおくん

こちらは「転じて樋口」一葉です。筆一本で家族を養っていた「一葉」は近くの質屋さんに通うことも多かったそうです。商売道具の「筆」を「質草」としている間は「けしぼうず」でも眺めているしかなかったか。清貧の庭に揺れる罌粟坊主です。

罌粟坊主いつまでたつても来ない明日 すりいびい

「明日」が来ると信じて日々を頑張っているのに、「いつまでたつても」希望の「明日」とやはやってくる気配もない。「罌粟坊主」はそんな作者をからかうかのように、けらけら笑っているのでしょうか。

罌粟坊主明日は来なくともいいのだ 桃猫雪子

すりいびいさんと双子のような一句。「明日は来なくともいい」と言い切っている桃猫雪子さん。希望の「明日」は来なくても、私たちは淡々と生かされていく、という諦念でしょうか。来ないなら来ないでいいーという開き直りでしょうか。「罌粟坊主」の複雑な性格を、この二句が対句のように表現しています。

鬱はあるかゴリラにも罌粟坊主にも 古田秀

「ゴリラ」と「罌粟坊主」、意外性のある取り合わせを繋ぐキーワードとして「鬱」という言葉が出てくる発想が新

鮮にして、説得力があります。「ゴリラ」はあんな敵つい顔をしつつ、時には愛嬌のある動きをしつつ、心に「鬱」を抱えているのかもしれない。「罌粟坊主」もまた、そのような一面性のある生き物なのだと言えそうです。

罌粟坊主メリーゴーランドは無人 なみはやらんる

「無人」のまま回り続ける「メリーゴーランド」の色彩と動き。それが風にゆれる「罌粟坊主」に重なっていきます。「無人」の一語は、「罌粟坊主」をゆらす風の無為なるイメージにもつながっていくかのような印象。

罌粟坊主わたり廊下は微かに弧 山香ばし

学校の花壇のヒナギクなどの「罌粟坊主」でしょうか。知らぬ間に生えていた罌粟がひよつとすると良からぬ種類ではないかと心配し始めているのかもしれませんが、なぜ学校を思ったのか。それはやはり「わたり廊下」という場所から。古い「わたり廊下」は真ん中がかすかに歪んで「弧」を描き始めている。あの「罌粟坊主」のこと、やっぱり明日にでも保健所に相談しよう！と校長先生は呟いているのかも。

第220回 2019年7月1日週掲載

やまもも

楊梅

《夏》温暖な地に育つ、15m以上にも伸びるヤマモモ科の常緑高木。雌雄異株。直径1〜2cmの紫紅色の丸い実は、そのまま食べるほか、ジャムや果実酒などにも用いられる。

天

ひもろぎのおおやまももの実の小さし 蟻馬次朗

「ひもろぎ」の「ひ」は雲、「もろぎ」は籬。漢字では「神

籬」です。「神霊が憑依している山、森、老木などの周囲に常盤木を植え、玉垣を結んで神座としたもの」と辞書には解説があります。

「ひもろぎのおおやまもも」は、神様を守るために植えられた籬としての楊梅でしょう。堂々たる常盤木、つまり常緑の大樹です。深閑とした神域、遠く微かな囁き。この「おおやまもも」は神のためのものだから「実」をとって食べる人もいないのでしょうか。「小さし」という発音が季語「楊梅」を鮮やかに描きます。「おおやまもも」は鬱蒼と茂り、神域の空気を清浄に濾過しているかのようです。小さな実を啄むのは、時折訪れる鳥たちだけなのでしょう。

地

こんなにも実り楊梅さみしそう めぐみの樹

「楊梅」の特徴はまさに「こんなにも実り」という状態でしょう。熟す頃にはびっしりと薺めくように実がなります。が、あの色合いは決して明るくはない。独特の暗紅色を「さみしそつ」と感じる心に共感します。

やまももに撃たれて拾ふやまももを 比々き

実つてくると「やまもも」は容易く落ちてきます。どんどん落ちてきます。地に落ちた「やまもも」を拾おうとすると、次々に私を打つ。「やまももに撃たれて」という前半の表現に実感があります。

楊梅に夜は来ないのかもしらん よだか

びっしりと熟した「楊梅」という存在は、すでに「夜」を内包しているのではないかと思うのです。だからあんな暗い色をしているのではないかと。作者の思いとは方向の違う受け止め方かもしれませんが、「楊梅」が鬱蒼と茂るのも「夜」への指向性がある生き物だからではないのか、という気がしてならないのです。

楊梅のおそろしく降る明日だらう

斎乃雪

なんだか不気味な予報というか予知というか。今、頭上に熟している「楊梅」は「明日」を境に、重力に持ちこたえられなくなつて「おそろしく」降り出すというのです。淡々たる「明日だらう」という措辞に暗い喜びの予感があつて背筋がゾクゾクします。

楊梅を噛めば未完の母の恋

よしおくん

「楊梅」は食べられる部分も少ないし、味も酸っぱいし、あまり美味しいものだという印象はありません。しかも、落ち始めるとやたらに地を紅く汚します。そんな特徴を思えば「未完の母の恋」との取り合わせが胸に迫ります。婚前の恋か、結婚後の恋か、はたまた夫の死後の恋か。さまざまなドラマが心をよぎります。

楊梅のひかひかペインクリニック

一斤染乃

「ペインクリニック」とは疼痛外来。「主として慢性で頑固な各種の疼痛、自律神経疾患などに対して、神経ブロックを行なつて治療する診療部門をいう」のだそうです。確かにこんな看板を掲げている医院を最近よく見かけますね。「楊梅」の大木のあるクリニックでしょうか。「ひかひか」というオノマトペは暗紅色の実の表現でありつつ、痛みのイメージとも重なります。「楊梅」「ひかひか」「ペインクリニック」三つの言葉が思いがけない言葉の火花を散らしている作品です。

楊梅の色のさみしき情事かな

RUSTY

「楊梅の色」は暗紅色。表面には小さな突起がびっしりとついています。「楊梅の色のさみしき」と完全に比喻になっているのですが、下五「情事」の二語が出てきた瞬間、確かに「楊梅」は比喻なんだけど、季語としての力を十分に發揮していることに軽い驚きを覚えます。鬱蒼と暗い「楊梅」

の木の下には、小さな家があり、そこで繰り広げられる「さみしき情事」は硬く冷たく酸っぱいものに違いありません。

楊梅の輪郭ぼやり村ぬるり

北野きのこ

「楊梅の輪郭」という印象に対する「ぼやり」というオノマトペは、広い意味での郷愁なのだろうかと思ひました。そういえば生家の近くに「楊梅」があつたなあという印象が「輪郭ぼやり」であり、その「村」に対する作者の心情が「ぬるり」なのだろうと。郷愁というのは、美しく懐かしいだけのものではない。それが季語「楊梅」の正体に近いものがある、という感覚の一句か。

ラズベリイがアンならば楊梅は美登利でせう

be

「ラズベリイがアンならば」はモン・ゴメリー作『赤毛のアン』でしようし、「楊梅は美登利でせう」は樋口一葉作『たけくらべ』でしょう。「ラズベリイ」も「楊梅」も木の実ですし、「アン」も「美登利」もそれぞれの人生を背負つて生きた少女。西洋と東洋の対比の妙を見せていただいて、なんだかしみじみと納得させられました。

第221回 2019年7月15日掲載

空蟬

うつせみ

《夏》蟬の抜け殻のこと。数年〜十数年を地中で過ごし、十分に成長した幼虫は、夏になると地上へ這い出し、木の幹や枝につかまって脱皮して羽化する。

天

出て行つて空蟬少しだけ閉まる

牟礼あおい

「空蟬」の一物仕立てですが、実際に観たというよりは、乾いた「空蟬」の背の僅かな切れ目を見つめていて、この

瞬間に思いが至つたのではないかと感じました。この小さな切れ目から蟬は体を振るように「出て行つて」、まだ柔らかなの残る殻が小さく撓み「少しだけ閉まる」。まるで科学番組みたいな映像ですが、感情を一切排し描写だけに徹底することで詩を産み出せるという見本のような作品です。「出て行つて」少しだけ閉まる」という叙述だけ取り足せば完全な散文。「空蟬」の一語が季語の力だけで立ち上がっている。そこにこの句の秘密と魅力があります。一句を読み終わった瞬間、私の耳には蟬の殻が小さく軋む音が聞こえてきたような気がしました。その虚の音こそが「空蟬」という季語の正体かもしれないと。

同時投句「何も彼も空蟬の外みづを買ふ」にも心惹かれました。「空蟬」の中という極小の空間と「空蟬の外」という果てしない空間が、半透明の殻を通して触れ合っている事実。「みづを買ふ」行為がこんなカタチで詩になるのか、という驚きもまた。

地

空蟬のまだ恍惚と湿りたる

一斤染乃

羽化した蟬が抜け出した後の「まだ」湿りたる」という状況を「恍惚」と表現。「空蟬」自体に、蟬の命の残がしばしとどまつているかのような感覚にもなりました。羽化という変容の不思議も恍惚と私たちの前にあります。

空蟬を幹より外すかりつと鳴る

一阿蘇鷺二

「空蟬」というものは、時間とともに「幹」の一部になつたがっているかもしれないと思ひました。その「空蟬」を「幹より外す」と「かりつ」と音がする。それはささやかな抵抗の音かもしれないし、生物から無生物となつた証拠の音かもしれない。

空蟬をかりかり猫はやはらかい すりいびい

落ちた「空蟬」を「猫」がかじっているのでしょうか。上五の助詞「を」の働きと「かりかり」というオノマトペで、その状況はありありと伝わります。「空蟬」の硬さと、抱き上げた「猫」の柔らかさの対比。下五の後の余白が、「空蟬」というモノの感触をリアルにします。

空蟬の百の目くすくす瓶に充つ ぐ

漢方薬店に並べられている「瓶」の中に「空蟬」がぎゅしり詰まっている様子を思ってもよいのですが、「空蟬」を好奇心で集めている「瓶」ではないかと読みました。なぜそのように感じたのだろうと言葉を見直していくと、「くすくす」という一語の明るい語感にその理由がありそうです。なんとまあ、こんなに集めて―と呆れつつ面白がっているような感覚が「くすくす」ではないかと。「百の目」と焦点を絞った点、「充つ」という漢字も意図が伝わる選択です。

空蟬を給湯室に置いたまま 花伝

「給湯室」の一語で場所と状況が想像できます。私は会社を思いました。お客さんに出すお茶を淹れようと「給湯室」に入ってみると、そこに「空蟬」が置かれている。一体誰が拾ってきたのだろう。「空蟬」との意外な出会いが、この日の小さな出来事として記憶されます。切れない「くま」 という終わり方も巧みです。

空蟬はキャラメルコーンより軽い 亀田荒太

比較してみると詩は生まれます。「空蟬」を手にとってみると「軽い」と思う。大きさといい色といい感触といい「キャラメルコーン」に似ていると思ったのは、一つの詩的発見です。さらに「より軽い」という描写のリアリティに共感。まさか味まで比べたりはしてないでしょうね（笑）。

空蟬に噛まれ神社が恐かった 蟻馬次朗

「空蟬」が噛みつくわけではないのですが、「空蟬」を手に取りうとした時、尖った脚の先端が指を刺したのではないかと想像しました。小さな子どもの頃の小さな出来事が、「神社が恐かった」という記憶となって刻まれます。「神社」の周りの鬱蒼たる森や、得体の知れないものを祀っている空間そのものもきつと「恐かった」に違いありません。

空蟬や人間は死んだら重い 玉庭マサアキ

この句も一種の比較です。蟬という命が抜け出した殻である「空蟬」はこんなに軽いのに、「人間」は「死んだら」ずっしりと重くなるらしい。いや、こんなに「重い」のだという実感と読んでもよいでしょう。「空蟬や」の強調が中七下五のフレーズとのバランスをうまく取っています。

同時投句「空蟬がおとなしさうな木に並ぶ」にも心惹かれました。

狒狒の手にむしられ空蟬の葉ごと ウエンズデー正人

何かの枝や幹に「空蟬」がついたままで、折られている焼べられている、という発想の句は幾つかありましたが、「狒狒」の餌となる「葉」の裏にくっついている「空蟬」という状況にオリジナリティとリアリティがあります。ジャングルとかではなく、動物園ではないかと。「狒狒の手」をじつくりと観察できていることもその理由ですが、「むしられ空蟬の葉ごと」むしゃむしゃ食べ始める姿が、檻の目の前にあるような映像です。

空蟬とよぶには崩れすぎてをり 古瀬まさあき

落ちたり踏まれたり潰されたり、さまざまな理由で「崩れ」てしまっている「空蟬」です。辛うじて「空蟬」であることが分かる形と色と感触。淡々と描写しているからこそ、この現実性を獲得できているのでしょう。「崩れすぎて

をり」の措辞も的確です。

空蟬のはさまっている排水口 星埜微円

雨に打たれて落ちた「空蟬」が、「排水口」に「はさまっている」のです。公園の手洗い場 水飲み場のような場所を想像しました。前夜の雨が激しかったのでしょうか。何気なく咬んでいるかのような「はさまっている」という措辞ですが、映像として実にリアル。さすがの描写力です。

空蟬の減らぬ静かな少年院 倉木はじめ

「空蟬」がやたらと張り付いている木々が並ぶ「少年院」。小さな運動場でしょうか。二階の窓から見える樹木でしゅうか。「空蟬」を手にしたたり、集めたりする子はいない「少年院」だと読んでもよいですし、「空蟬」というモノに「少年院」に暮らす少年たち自身を重ねて読んでもよいでしょう。「静かな」の一語に、作者の思いが読み取れます。

同時投句「空蟬を潰して待機児童かな」も社会派の一句。

空蟬や人はゆつくり空になる はなまる

「空になる」を最初「そらになる」と読みましたので、亡くなって空へ上る＝空になる、という意味かと思ったのですが、「空」は「から」と読むべきではないかと考え直しました。「人はゆつくり空（から）になる」と。痴呆という意味で記憶がゆつくりと空になっていくのかもかもしれません。終末医療の現場では点滴のみで生き続ける人たちもいて、それはまさに肉体が空になっていくことかもしれないと。蟬の時間と人間の時間。その長短はあるにしろ、みな生き物は「ゆつくりと空に」なつて静かに死を受け入れるのです。

はも 鱧

《夏》 太平洋やインド洋などに広く分布するハモ科の海魚。穴子に似た形で、鋭い歯を持つ獰猛な魚。体長1m50cm、2m。日本では瀬戸内海、四国、九州の沿岸に多い。

天

幣よりも白明るかり湯引きの鱧

天玲

「幣」は神前に供える御幣。紙などがその素材となります。「幣よりも白明るかり」は「幣（の白紙）よりも白（が）明るくて」という意味になります。夏が来ると「鱧」が食べなくなる、「鱧」を食べると夏が来たなと思う。京都や大阪の人たちにとって夏の代表的風物のひとつが「鱧」です。「湯引き」された「鱧」はいかにも涼やかに盛り付けられているのでしよう。なんと美しい「白」だろう、なんと清々しい明るさだろう。花のように開いた「湯引きの鱧」をみたるとたん、さつきお参りしてきた神社の真新しい「幣」を思い出したのかもしれない。夏越の祓の帰りに寄った店かしらと想像も広がります。季語「鱧」のもつ晴れの印象が気持ちよく表現された一句です。

地

こりや鱧か そや噛まれなや噛まれなや

樫の木

「こりや鱧か」という困惑。「そや」という答える相手。「噛まれなや噛まれなや」という台詞だけで、二人の人物と「鱧」をめぐる顚末、その場の様子がありありと想像できます。「鱧」らしさを表現するために、京都や大阪の言葉で語ってみるという発想の句は他にもありました。この句は「鱧」の一物仕立てのな切り取り方。さすがの一句です。同時投句「送別や湯引きの鱧の千切れちぎれ」も上五に

対する下五の描写など、巧い作品です。

なんとする届きし鱧の五を余る

いづぼうろ

沢山の魚をもちつて困惑するという内容の句はいくらでもあるのですが、確かに「鱧」ほど困るものはないなど笑ってしまいました。「なんとする」という出だしの台詞。「五を余る」というあやふやさの効果。この後どうしたかしらと想像するとまた可笑しい。

鱧の歯に人差指を損じけり

うに子

「鱧の歯」の鋭さを今更ここで解説するまでもないでしょうが、中七下五「人差指を損じけり」という平然たる語り口に味があります。すでにかつての武勇伝となっている出来事なのだろうと読みました。この淡々たる「損じけり」が「鱧」の空気感に似合うのかもしれませんが。

水鱧や水は鬼門の山より来

かもん丸茶

「水鱧」は始めの頃の小ぶりの鱧。梅雨に入り、産卵を前にした頃の鱧が一番おいしいともいわれています。梅雨の雨水を飲んで美味しくなる「水鱧」を「や」と強調した後、「水は鬼門の山より来」との展開が二ついですね。「鬼門」とは鬼が出入りする方角。忌むべき方角の山からながれる「水」こそが、「水鱧」を美味しくしてくれるのです。これも「天」に推したかった一句。

牡丹鱧反り返り咲き沈みたり

もりたきみ

「牡丹鱧」とは、骨切りした鱧に片栗粉をまぶし湯引きしたも。湯の中で「反り返り」そして牡丹のように「咲き」さらに静かに「沈み」と徹底的に描写しました。動詞をこれだけ使っていますが、ゴチャゴチャした感じはありません。そこには鱧が「牡丹鱧」となっていくさやかな時間が切り取られているのみです。

「あとがき」のやうな味です湯引き鱧

比々き

「鱧」の味や食感に慣れない人の中には、味がなと感じる向きもあるようです。「あとがき」のやうな味とは、なかなか妙な表現。「くです」との口調にも実感があります。清々しく淡泊な「あとがき」でありますね。

同時投句「鱧皮の焦げの攀じれも浪花かな」も粋な一句。

竜神様に酒を持てもて鱧つくし

いさな歌鈴

「竜神様」へ供える酒は、水鱧を育ててくれる水への感謝でもあります。「酒」もまた美味しい水があつてこそ恵み。「酒を持てもて」という賑やかさ、「鱧つくし」の豪勢。季節の到来を喜ぶ「鱧」であります。

同時投句「鱧の身の爆ぜて祇園のをんなかな」

どの顔も鱧喰つたよな京男

テツコ@第二まる安

「京男」のイメージは、お公家さんの瓜実顔でしょうか。どの顔も鱧喰つたよな」は、「京男」への、そしてまた京都という伝統の国への皮肉も入っているとも読めます。そんなご意見も何処吹く風。「京男」たちは涼やかに「鱧」を食すのでしよう。

鱧臭う女たらしは治らない

丸山隆子

「鱧」という魚は美味ですが、凶暴。晴れと藪の両面の印象を持つ季語でもあります。「臭う」は負の印象の動詞として出現。「女たらしは治らない」は或る男への吹きか、罵りか。「女たらし」は、鱧喰つたよな瓜実顔の男なのかもしれませんね（苦笑）。

性病をもらつて鱧の皮固い

ウエンスデー正人

「鱧」から花柳界、つまり芸者や遊女の社会を連想したのでしよう。ある時代の郭や赤線を想像しました。「性病をも

くつわむし

轡虫

《秋》 キリギリス科の昆虫。緑色と茶褐色の個体があり、体は大きい。8月〜9月、ガチャガチャと馬のくつわを鳴らすような鳴き方をするのが名前の由来。「がちゃがちゃ」とも呼ばれる。

祭鯉食うて遊べや人さらひ

ぐ

「祭鯉」とは、京都の祇園祭、大阪の天満祭の頃の鯉。祭り膳には欠かせない食材です。「祭鯉食うて遊べや」の「や」は呼びかけのような働き。祇園祭や天満祭で賑わう人波も見えてくるようですが、下五に出現する「人さらひ」の一語に驚きます。祭に出没する「人さらひ」なのか、京大阪の遊里に女を売り飛ばす「人さらひ」なのか。「人さらひ」の一語を深読みしていけば、これまた映画が一本書けそうな一句ではありませんか。

同時投句「泥水啜るつもりもないし鯉も喰う」も映画の台詞のようで、忘れがたい。

怖ろしき齡にどつと鯉の花

棕本望生

「怖ろしき齡」は老年老境と読むのが妥当なのでしょうが、自分自身の「齡」と読むか、他人の「齡」と読むかによってもニュアンスが変わってきます。さらに「怖ろしき齡」を文字通りに怖ろしいと読むか、年齢に対する自嘲、年齢を受け入れての諦観と、読みは様々に揺れます。どの読みを選んで鑑賞しようかと迷う心に、「どつと鯉の花」が開きます。湯引きの鯉の白さをみれば、まあ歳のことはさておいて、美味しく頂くのではないかと、そんな気持ちにさせられましたよ。

天

轡虫と貧乏神のさびさびと

せり坊

「轡虫」はキリギリス科。傍題の「がちゃがちゃ」はその鳴き声から。馬の轡が鳴る音に似ているとは、なるほど納得の命名です。

秋の季語となっている虫たちは様々あります。例えば、鈴虫の別名は「月鈴子」。鈴を振るように美しく鳴くという命名です。鈴虫の音が響く夜に「貧乏神」なんてやってくるような気はしません。庭とも呼べないようなウチの庭で「轡虫」がガチャガチャ鳴きやがる。こんな夜に「貧乏神」がやってくるのか。いやいや、我が家には「轡虫」と「貧乏神」がすでに居着いているに違いありません。

「轡虫」と「貧乏神」の取り合わせもさることながら、下五「さびさび」という押さえが、「轡虫」の鳴く庭の様子、「貧乏神」の風体、作者の心情までを想像させ、飄々たる味わいを醸し出します。

地

女子寮の石鹼硬しくつわ虫

ゆすらい

「女子寮」という場所、その手洗いか洗面台に置かれている「石鹼」、それが「硬し」という感触、きっちり描写できていますね。「硬し」の二語が、下五「くつわ虫」と「女子寮の石鹼」をつまく繋いでいます。取り合わせの骨法を

掴んでいる一句。

耳塞ぎたきはがちゃがちゃではなくて

茄子美

耳を塞ぎたいのは今聞こえている「がちゃがちゃ」の声ではないのだという語りに、心をハッと衝かれます。嗚呼、もつともかまが嫌だ嫌だ！と耳を塞ぎたくなる日。「く」ではなくて「の」後の空白に作者の心が滲みまします。

馬の尿は滝のごときや轡虫

亀田荒太

一体何の音かと振り向くと、厩舎に並ぶ「馬」の二頭の「尿」だと分かり、えっ!と思う。「滝のごときや」という驚きにリアリティがあります。実際こんな感じですよものね。滝のような尿の音がやむと「轡虫」の音が戻る。「馬」と「轡」のささやかな響き合いも計算済みの一句でしょう。

轡虫月をよごさぬやうに鳴く

きゆうもん@木ノ芽

「轡虫」のガチャガチャは濁った音なのに、「月」の美しい夜には「月をよごさぬやうに鳴く」と感じているところに詩があります。空には澄んだ「月」、草むらには「轡虫」の音、滑稽に傾きがちな季語「轡虫」をこんなふう綺麗に描けることに拍手を贈りたいですね。

つくづくともろい切岸くつわ虫

みちる

「切岸」は切り立った崖です。崖を見上げているのでしょうか。崖を覗き込んでいるのでしょうか。火曜日「俳句道場」に「轡虫の食草が葛とは……／＼アガニョーク」という情報に寄せられていましたが、この「切岸」には葛も生えているのかも知れません。「くつわ虫」の音にもポロポロ崩れてきそうな「もろい切岸」です。

轡虫人みなちよつと不良品

あいだほ

「轡虫」の傍題「がちゃがちゃ」からの発想でしょうか。「不良品」という言葉がこんな使われ方をしていることにドキッとします。「人」はみんな「ちよつと不良品」なんだよと言われてみると、我が身からガチャガチャと音がしているような気がしてくる。面白い作品です。

がちゃがちゃの旅路ざらつくほどの星

ぐ

「がちゃがちゃの旅路」という詩語に心惹かれます。轡虫が生きて死ぬまでという意味かもしれないし、オトナの絵本のような世界をも感じさせます。「がちゃがちゃ」が鳴けば鳴くほど、「星」たちは「ざらつく」のです。星々の心がざわつくのです。

無人ビルの鉄骨清か轡虫

ほろろ。

「無人ビル」は壊れて「鉄骨」が剥き出しになっている所もあるのでしょうか。「無人ビルの鉄骨」と「轡虫」の取り合わせは、鉄と轡のイメージを沿わせているわけですが、実は中七「清か」の一語が一句の要。秋の寂しき、澄んだ空気をこの言葉がありありと伝えている。取り合わせの接点となっています。

壁をなす盾の光りて轡虫

小市

「壁をなす盾」って何?と思った瞬間、デモ隊に向けられる「盾」なのだと思いました。それが光っているという視覚に「轡虫」の音が重なってくる。この季語の使い方は、むしろ比喩的效果を持たせようと意図しているのかもしれない。中七「て」はプラスマイナスあるうかとは思いますが、実際にデモの現場に向かなければ掴めない生々しい一句であることは間違いありません。

轡虫ひばは後妻だったのか

りんたろう

あーあるよな、こういう話……と納得して、この子のさやかな驚きに共感してしまいました。祖母ではなく「ひばば」という年代的距離感が、この句のリアリティになっているのかもしれない。「轡虫」みたいにガチャガチャした「ひばば」だったのかもしれないし、「後妻」だったという事実への感慨が「轡虫」の音めいていたのかもしれない。「のか」の後の空白も巧いですね。

第224回 2019年9月9日掲載

あきばら

秋薔薇

《秋》「薔薇」は4月〜5月頃に咲くことから夏の季語だが、盛夏を過ぎた後、秋涼しくなって再び咲いたものを「秋薔薇」という。2度目の開花であるため樹勢に左右され、花は小ぶりであることが多い。

天

ルビといふきれいな響き秋の薔薇

久我恒子

「ルビ」とは、漢字等に付ける振り仮名です。なぜ振り仮名をルビと呼ぶのか。ものの本によると、英国でルビーと呼ばれた欧文活字の大きさが、和文で振り仮名として使われていた活字とほぼ同じ大きかったことから、こう呼ばれるようになったそうです。

一句「読、確かにそうだと気付かれます。私たちの心は「ルビ」という音を「きれいな響き」だ感受しているのではないかと思うのですが、このように言葉にされるとハッとします。英書を読んでいるのか、詩集に心動かされているのか。傍らの「秋の薔薇」は「ルビ」という名の美しい活字のように小さく咲いています。つかず離れず響き合う言葉たちが放つ、詩という名の静かな火花のなんと「きれいな」ことが。

地

秋ばらの剥き出す雌しべの水分量

野の花さな

「秋ばら」の一物仕立て。「秋ばら」の「雌しべ」が剥き出しになっていることに気付いただけでもたいした観察眼だと思えますが、その「雌しべ」の少し萎えて乾いている感じを「水分量」とのみ表現。まるで理科の観察記録のような言葉を使いつつ、ちゃんと「秋ばら」を描写しているのに舌を巻きます。小学生俳人さなちゃん、私にとってライバルの一人です。

秋薔薇のまばらを満てる水の息

とおと

こちらは潤いのある「秋薔薇」です。花々は「まばら」に咲いているのだけれど、その空間を満たすように「水の息」を感じするたおやかな感性。秋薔薇の水の息と作者の息が静かに呼応していくかのような詩的空間。「秋薔薇」のみずみずしさを「水の息」と表現した詩語も素敵ですが、中七「まばらを満てる」という詩的描写があるからこそ生きる下五「水の息」です。

秋の薔薇アーメンだけを小さく言う

シュリ

「秋の薔薇」の咲く教会の葬儀に列席したのだろうかと思像しました。自分はクリスチャンではないのだけれど、大切な人の葬儀なのです。牧師さんのお話、パイプオルガンの響き、聖歌隊の賛美歌。祈りの言葉も知らないし賛美歌も歌えないけど、最後の「アーメン」だけを小さく言う、この中七下五のつぶやきに静かな戸惑いと悲しみと祈りがこもります。

秋薔薇を咲かせて静かなる退所

大塚迷路

「秋薔薇を咲かせて」まではどうということのない措辞ですが、後半「静かなる退所」で光景や場面がみえてくるの

です。特に「退所」の一語がもっている働きは大きいですね。介護施設のような所を退所するのでしょうか。元気な時はこの「秋薔薇」の世話を率先してやっていたお年寄りかもしれない。科学研究所の所長かもしれない、演劇を学ぶ研究生かもしれない、思いが広がるにつれ違った人物が次々に立ち現れてきます。「静かなる」は人物でありつつ、「秋薔薇」の佇まいも想像させます。

猫の耳つまみひんやり秋の薔薇

一 阿蘇鷺二

猫と身近に接することがないので、ひとまず調べてみました。「猫の耳」は通常は冷たい。温度調節をする機能を持っているので、熱を体外に放出する時のみ耳が熱くなるのだそうです。

「猫の耳」をつまんでみる。いつものように「ひんやり」としている。猫の耳は薄い。ぼんやりとひかりを通す、もも色もきれい。そして「秋の薔薇」もきれい。一句に全体に秋の愁いめいた気分も漂う大人の作品です。

秋薔薇や寂しい夜に嗅ぐ石鹸

衷子

「秋薔薇」の香りを描いた作品は沢山ありましたが、「石鹸」という別の匂いを取り合わせてくる発想にささやかな意外性があります。洗面台やお風呂の石鹸か、タオルや下着などの引き出しに潜ませる香り石鹸かもしれません。いずれにしても「寂しい夜に嗅ぐ」というのが一句の眼目。「秋薔薇」と「石鹸」、寂しい心をもてあます夜の香りです。

セロのぐと香るや秋の黒薔薇は

樫の木

宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』を読んだことがありますか。「ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした」の一文から始まる小品です。チェロではなく「セロ」というとすぐにこの作品を思い浮かべてしまいます。

「セロのぐと香るや」という比喩と強調が「秋の黒薔薇」のことだとわかった瞬間の香しい感嘆。ときに優美にとき

に切なくときに荒々しく響くセロの音は、秋の薔薇の中でも黒という色に象徴されるに違いないと思わされました。「香る」の一語がこの位置にある巧さも誉めたい一句です。

人形の影のほつれて秋そうび

ゆうが

薔薇と人形という素材の取り合わせはあるかと思いますが、「人形の影のほつれて」という描き方が繊細です。実際に「人形」の布の部分がほつれているのかもしれませんが、もう遊び相手ではなくなった「人形」に対して「影のほつれて」と心理的描写をしたのかもしれませんが。「人形↓影↓ほつれ」とクローズアップした映像から、「秋そうび」へと焦点が移る。このカメラワークが巧い作品。小学生俳人ゆうが君も、私にとつては頼もしいライバルです。

秋薔薇や羅馬の市場のチーズ売り

28 あずさち

「秋薔薇や」と強調した瞬間、「羅馬」の光景にカットが切り替わります。「羅馬」はローマの和名。訪れた「市場」には美味しそうな「チーズ」を売っている店があったのでしょね。中七が八音になつてはいますが、「羅馬の市場の」と「の」の音がリズムを作っている、そんなに気になりません。下五「チーズ売り」で人物、売り声、会話、市場の喧騒などが立ち上がりつつ、「秋薔薇」「羅馬」「チーズ」の三つの単語がほどよい距離を保ちつつ、豊かな歴史を持つ国の今の表情が描かれています。

ちゃんと痛いか秋薔薇を抱いてみよ

霞山旅

感情も痛点もなくしているかのような深い失意でしょうか。第三者に「抱いてみよ」と呼びかけているのかもしれませんが、ガラス玉のような己の眼を鏡の中に見ているのではないかと読みました。どうしたんだ、私。いつまでこんな眼をしているつもりか。「ちゃんと痛いか」、人としての心と体はあるのか。「秋薔薇を抱いてみよ」その棘の痛さを感じ、その香りに慰められてみる、と自分に鞭打ち、自分

を励ます。

詩人なら秋薔薇の棘刺して死ね

こま

人として生きる喜びや悲しみを歌い上げるのが「詩人」ではありませんか。「詩人」であるのなら「秋薔薇の棘」を我が胸に「刺して」死ぬぐらいの気概をもって、歌い続けなさいよ。

さきほどの「ちゃんと痛いか」の続編のような作品でもあります。「詩人」のところが俳人にしてもよいのですが、「秋薔薇」には「詩人」のほうが似合うかもね（笑）。

第225回 2019年9月23日週掲載

たつたひめ 竜田姫

《秋》奈良県生駒郡の西にある竜田山を神格化した女神。五行説では西が秋にあたるため、春の佐保姫（さおひめ）に対して、山を紅葉させるなど秋をつかさどる神とされた。

天

昂りの眉青青と竜田姫

とおと

「青々」は「せいせい」とルビが振られていました。「おおお」と読めば、青という色に意味が限定されてきますが、「せいせい」という音は「晴晴」「清清」＝さっぱりして気持ちのよいさま、心にわだかまりがなくすがすがしいさま、を連想させます。時代考証として正しいのかどうか分からないのですが、「読」瞬「青々」と刺つた眉を思つたのも「青々」という字面の印象かもしれません。

「竜田姫は竜田山を神格化した言葉でもあります。」「昂り」とは、山を秋に変える営みに対する心の動き。秋を司る女神としての気概と誇りでもあるのでしょうか。きりりと引き締める「眉」。晴晴と清清と秋色に塗り替へらる山。艶やかな神話のワンシーンを見るような作品です。

神鏡は昏い太陽竜田姫

ちやうりん

「神鏡」には三つの意味があります。①三種の神器の「八咫の鏡のこと。②神社などで神霊としてまつる鏡。③神社で御神体の前に置く鏡。どの意味で読んだとしても「神鏡」の鈍い光がみえてきます。「神鏡」そのものがまるで「昏い太陽」のようだという一句。「竜田姫」が変えていく山の色もまた、「神鏡」に鈍く映ります。

日本の太陽は赤竜田姫

玉庭マサアキ

日本の本とも呼ばれる「日本」。国旗の太陽も子どもたちが描く太陽も、確かに「赤」です。その「日本の太陽」の下で、「竜田姫」は今、秋を呼び込み、山河を秋の色に染めていきます。八百万の神々に守られた日本をもイメージさせる一句です。

竜田姫山は淋しいほど高い

さとけん

「山は淋しいほど高い」の「ほど」を、程度と読むか、様態と読むかで意味が変わります。淋しい山ほど高くなるのだと読むか、私の心が淋しくなっていくかのよう高いと読むのか。どちらの読みにも惹かれますし、むしろ二つの読みがあるからこそ、この作品に奥行きが生まれるのだとも思えてきました。「竜田姫」の心の奥底にも淋しさがあるから、鮮やかな色を欲するのかもしれない。

竜田姫さびしき雲を置いてゆく

にゃん

「竜田姫」は秋を造化していきます。「さびしき雲」を置き去りにする速さで、山河を駆けめぐります。「さびしき雲」は淋しき色合いでそこに「置いて」いかれますが、色づいていく秋とのコントラストを美しくするために、そこにあるようにも感じられます。

竜田姫ここよりまほろばといへり

クラウド坂の上

「倭は国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭しつる」はし 日本武尊の望郷歌と言われるこの歌が大好きです。龍田比売神が祀られる竜田山が、奈良盆地の西にあるということとです。この作者のコメントも添えられていました。実はこの原稿を書いている今、私は「青垣」と呼ばれる山々を一望できるガラスの箱のような部屋にいます。奈良盆地を取り囲んだ山々が見渡せる場所です。「ここよりまほろばといへり」という詩語が、眼前の光景と一体化してくる。「竜田姫」も同じ光景を目にしていたに違いないという胸躍る感慨を抱きました。

たうたうとたつたのかはへたつたひめ

武井かま猫

「たうたう」は、「滔滔」でしょう。水が勢いよく、また豊かに流れるさまを意味します。「たつたひめ」が山々を秋の色に変えた後、山々はその色を川へ映します。紅葉の錦竜田川とも謳われる光景です。「たつたのかわへ」の「へ」が、まさにその光景を思わせるのです。

竜田姫滝にほと岩へのご岩

ウエンズデー正人

日本の本の国の山河にはこんな「滝」もあるに違いありません。「ほと」は、女性器の外陰部を意味する古語。「へのご」は、陰茎、陰核、睾丸などを意味する古語です。神話の世界では、神々はおおらかに時に激しく愛を語り、交合します。その痕跡のよに残る「ほとと岩」や「へのご岩」。秋の女神「竜田姫」が染め上げた秋の山々にある「岩」もまた、神々の足跡かもしれません。

「滝」は夏の季語ですが、この句の場合はタ音を響かせつつ、「竜田姫」という空想的な季語を映像化することに一役買っております。

櫛の歯のあはひにひかり竜田姫

さるぼぼ@チーム天地夢遥

「竜田姫」が、自らの髪を梳く「櫛」でしょうか。それとも山々を秋色に彩っていくための道具が「櫛」なのでしょう。うか。「櫛の歯」の間の「ひかり」が、美しい秋光となって野山を山河を染めていくのでしょうか。「竜田姫」と「櫛」を取り合わせた句も幾つか見られましたが、発想の独自性を褒めたい作品です。

第226回 2019年10月7日掲載

ちようよう
重陽

《秋》陰暦9月9日の節供で、元は中国の行事。九は陽数で、九を重ねることから「重陽」「重九」という。菊の節供ともいわれ、この日に長寿を祈って飲む酒を「菊の酒」という。

天

須臾の間を重陽の富士過ぎゆけり

くらげを

「須臾」とは短い時間、ほんの少しの間を意味します。「しゅゆ」と読みます。ほんの短い間に、重陽の富士が過ぎていったという一句は、新幹線の車窓に観る「富士」を思わせます。「重陽」は陰暦九月九日の菊の節句。「重陽」と「富士」の取り合わせといえば、水原秋枝子の「重陽の山里にして不二立てり」を思い出しますが、「須臾の間過ぎゆけり」という状況に現代性があります。「重陽」の日、中国では、高い所に登って菊酒を飲み長寿を願いましたが、一句における「富士」の「語が古代からの風習を匂わせ、「須臾」の一語は時間への感慨を示唆します。長生を祈る「重陽」の日の「富士」は、菊日和の見事な青空を背にすくと聳えているのです。さりげなく作っているかにみせて、様々なイメージを内包する。まさにベテランの味の一句です。

例えば、カマキリが孵化してくる時、あんな小さいのに全部がちゃんとカマキリの形をしていることにささやかな感動を覚えますが、「茸」はちよつと違つたですね。「茸」はキノコだと判断できる形になつて始めて「茸」だと認識できる。「茸と呼べる大きさ」なんだけどころな「小ささ」という発見を「ぎりぎり」の一語が繋ぎます。しかも種類を超えて全ての「茸」に当てはまる詩的定義。「ぎりぎりの小ささ」という措辞は映像としても成立。コロンブスの卵のような一句であります。

同時投句「命日にかならず生えてくる茸」も感慨深い作品。

地

茸ほつほつ菌糸が痒い御神木 いしはまらんる

「茸」が生えている木は「痒い」と感じているのではないか、という発想の句がなかったわけではありません。が、「茸ほつほつ」という擬態語「菌糸」と具体的に述べ、さらに「御神木」の一語によつて大木であることも分かる。発想を生かすために、丁寧な言葉選びができています。

同時投句「茸ヨ茸ダレニモイフナ家ヲ捨ツ」「茸ひそひそ夜半に倒れる木のうわさ」の発想もいい。

茸累々人に濡れている部位 小泉ミネルヴァ岩魚

「茸」を人間の「部位」になぞらえる句もそれなりにありました。が、具体的な部位をそのまま書くのではなく「濡れている部位」とそれらの共通項を書くことで詩に昇華させる。このあたりが巧いのです。上五「茸累々」からの展開もまた。

同時投句「いま鼻で笑つたはだれ茸山」「窮と鳴くくさびら錫杖に刺され」も生々しい虚。

眠つてはだめよ茸の甘い息

古都ぎんろ

「茸」という生き物は、肉体を感じさせるのかもしれない

ん。擬人化した句も多かったのですが、「眠つてはだめよ」はまるで雪女の言葉のようでもあります。「茸」の匂いを「甘い息」と表現。毒茸を食べてしまった男は、「茸の甘い息」に捕らわれてうつとりと死んでいくのかもしれない。

同時投句「くさびらへ猪の鼻先猿の指」鳥獣戯画みたい

図鑑ほど茸垢抜けてはいない

蟻馬次朗

なんとも率直な一句。「図鑑」の写真はこんなにきれいなのに、目の前のそれは「垢抜けていない」。ほんとに同じキノコなのかと、「図鑑」を手に何度も眺めているのでしょう。これもまた実感。

同時投句「万葉のみに茸がこんなに」万葉の一語に悠々たる気分。

ことごとく図鑑に載つてゐぬ茸

板柿せつか

「茸」を採つてきて、どれが食べられるキノコなのか、調べているのです。「図鑑」片手に茸山吟行に出かけたのかもしれないですね。前出句のように「図鑑」と比較する、揚出句のように「図鑑」に載つてないという発想の句もそれぞれありました。この句の眼目は上五「ことごとく」です。幾つも幾つもある「茸」の全てが、という状況がこの一語で分かる。派手な色、変わった形の「茸」が沢山ある様子がありありと想像できます。

同時投句「ぬまは月きのこは星のほひかな」美しい詩句。

石突は殯の名残茸生ふ

古田秀

「石突」とは「いしづき」と読みます。茸の軸の下方の固い部分をいいます。「殯」は「もがり」と読みます。辞書には以下のように解説してあります。【殯とは、日本の古代に行われていた葬儀儀礼で、死者を本葬するまでのかなり長い期間、棺に遺体を仮安置し、別れを惜しみ、死者の靈魂を畏れ、かつ慰め、死者の復活を願いつつも遺体の腐敗・

白骨化などの物理的変化を確認することにより、死者の最終的な「死」を確認すること。その棺を安置する場所をも指すことがある。】

意味が分かると納得しませんが。「茸」の軸の下の固い部分は、死を確認するためにずつと残していたものだというのです。そこから新しい命が生えてくる。命の循環というものに思いを馳せる。これも天に推したかった作品です。

同時投句「茸山や仄かに熱き野宮跡」「修験者とすれ違ひたり茸山」実景がみえてくる茸山。

茸食み油田の燃えているニュース

灰色狼

淡々と「茸」を食べているのです。テレビでは「油田の燃えているニュース」が流れています。その映像を見ているうちに、ガソリンが燃える時の熱や臭いが生々しく立ち上がってきたのかもしれない。その瞬間に、「茸」の噛みごちや匂いが違つものに感じられてきたのかもしれないと、ささやかな深読みも。

美しき茸の毒と妻の耳

亀田荒太

「美しき茸」という言葉もかなりありましたが、「妻の耳」との取り合わせに独自性があります。「美しき茸」には強烈な「毒」があり、「妻の耳」も地獄耳という強い毒をもっているよ、という夫の実感かもね（笑）

同時投句「茸摘む嫌ひな奴は死ねばいい」率直な悪態に、苦笑しつつ共感。

茸裂く母は自分のことばかり

be

「茸」を裂いているのは作者でしょうか、「母」でしょうか。お互いに焼けた「茸」を裂きつつ、食べつつ話しているのでしょう。「母」の話題はいつも「自分のことばかり」。自己を中心に地球は回っていると考えるタイプの母。小さなため息に「茸」がツンと香ります。

同時投句「秘め事は茸を狩りし左手で」妖しさの左手。

苺スープ熱し皇帝は死んだ

ぐでたまご

「苺スープ」が熱いということ、「皇帝は死んだ」ことが並列の型で書かれているだけですが、読み手は脳内で関連づけてしまします。「皇帝」はきつとあの日の熱い「苺スープ」で暗殺されたに違いない、と。世界の歴史において、こんな「皇帝」もいたに違いないと思わせられます。そしてこの「苺スープ」は死と交換されるほど美味であつたに違いないと。

同時投句「恋をしたやうな苺探すやうな」「超新星爆発はるか苺ひろく」味わいの違う二句。

第228回 2019年11月4日週掲載

檸檬

れもん

《秋》 甘味より酸味を利用する柑橘類の代表。ミカン科の常緑低木。冬に暖かく、夏に乾燥する気候を好むため、日本での産地は限られる。ビタミンCのシンボルとして知られる。

天

檸檬に棘たれかふれてはくれまいか あるきいちはる

季語「檸檬」は、店先で売っている秋の果実としての認識がほとんどではないかと思ひます。檸檬栽培している季語の現場に向ひて、何に驚くかというところ、「檸檬」の木には実に鋭い「棘」があることです。野生動物に対する自衛のトゲなのだと思いますが、それにしても用心深すぎるのではないかと思ひつほどの長く尖つた針なのです。

私は檸檬です。明るい黄色の実をつけますが、枝には鋭い「棘」があります。でも「たれか」に触れて欲しいと願う心をもつた「棘」なのです。酸っぱい青春めいた描き方をされがちな「檸檬」ですが、「棘」という映像を象徴的に取り出し、大人の愁いを描いた作品。「たれかふれてはくれまいか」という切ない息のよくな咬きに心がゆれます。

同時投句「これは檸檬あれば「愛している」の手話」にも惹かれました。

地

庭に生る檸檬に殴られる朝だ

文月さな女

朝の出動。慌ただしく玄関を飛び出すと、枝を張っている「檸檬」の枝。黄色い「檸檬」。その果実に「殴られる」という勢いのある措辞がいいなあ。「殴られる」そのものはマイナスのイメージを持つ言葉ですが、下五「朝だ」との断定も含めて、エネルギー的な「朝」と読んだほうが、季語「檸檬」が鮮やかです。

檸檬まる嚙り鎖骨が羽化しさう

倉木はじめ

「檸檬」を「まる嚙り」する句も沢山寄せられました。みんなほんとに丸かじりなんかするのかな……と、いつも懐疑的な気持ちになるのですが、この句は「鎖骨が羽化しさう」という比喩とのバランスが巧いですね。青春性も感じられる一句です。

しむらのいづこにころれもんきる ローストビーフ

青春性という意味では、この平仮名書きの句にも強く惹かれます。この「しむら」とは身体を意味します。我が肉体のどこに「ころ」があるのだらうと、自問自答しつつ「れもん」を切っているのです。恋の愁いでしょうか、生きることへの疑問でしょうか。「れもん」の香が鼻腔を鋭く刺します。

同時投句「檸檬あり明日も百年後も未来」にも共感。

リハビリは檸檬を握る香るまで

あつむら恵女

「リハビリ」のために「檸檬」を握るのだということです。まずは「握る」ことから始まり、少しずつ握力が戻ってく

ると「香るまで」握れるようになる。その健康的な香りは喜びの証です。

占領や檸檬これでもかと握る ウェンズデー正人

同じく「檸檬」を「握る」のですが、上五が状況を述べます。「占領や」という強い言葉が、「これでもかと握る」意味を伝えます。地中海あたりの戦争の歴史を思いました。悔しさ、怒り、悲しみの香る「檸檬」です。

嗚呼檸檬こんなに打たれ弱かつたのか いさな歌鈴

他者に対しての「こんなに打たれ弱かつたのか」というガッカリ感と読むことも、「檸檬」自体に向かって嘆いているとも読めますが、私は自問自答だと読みたい。もつと頑張れる自分だと思っていたのに、という自嘲。「嗚呼檸檬」と眼前の檸檬に向かつて、咬く心に寄り添いたい一句です。

檸檬噛むあゝ敵もくるしいのだな 稗田鈴二郎

苦しい試合展開。作戦タイムの敵ベンチを横目に「あゝ敵もくるしいのだな」と己を鼓舞すると読むのが妥当なのだと思います。が、スポーツの現場から離れても、十分鑑賞できる一句ですね。生きていく上には、さまざま「敵」もいます。薄切りにしてある「檸檬」を噛んで、「あゝ敵もくるしいのだな」と状況を分析し、次の一手を考える。私たちはそんな社会を生き抜いてもいるのです。

搾られたそれを檸檬と呼ぶべきか 多々良海月

カスカスに「搾られたそれ」は、よくよく見ると「檸檬」なのです。ここまでになったものは、すでに「檸檬」とは呼べないのではないか。いやいや「檸檬」であつたもの……と呼ぶべきか。こんな視点が楽しい一句です。

檸檬持ちソファへ倒れ込むトライ 野地垂木

「檸檬」は楕円形ですから、ラグビーボールを連想した句も沢山届きました。形の相似を述べたに終わったものが多かったのですが、この句の場面はともみずみずしい。「檸檬」をもって「ソファ」に倒れ込んでるのは誰でしょう。若い恋人たちかもしれません。最後の「トライ」の一語の若々しき。

みんなきらいレモンすっぱくなんかない よだか

「みんなきらい」は、思春期の強がりでしょうか、反抗でしょうか。「レモンすっぱくなんかない」と言い放つ、傲慢な若さ。敢えてカタカナ書きにしている「レモン」のかたさもいいと思います。

檸檬の傷あかるし部活引退日 高橋無垢

「檸檬」にある「傷」を「あかるし」と感じるのはなぜ？と思えば、「部活引退日」だということです。日々使ってきた部屋に別れを告げる日。「あかるし」の一語が、三年間部活動をやりにきった達成感を思わせませす。

海豚には遭へず檸檬をもらいけり 霧子

「海豚」は冬の季語にもなっていますが、この句は「檸檬」が主たる季語ですね。「海豚」には「遭へず」ですから、実体はない。「檸檬」は手のひらにある。下五「もらいけり」が状況をコンパクトに描いています。作者からはこんなコメントも。「先月、西予市三瓶町の湾に20頭位のイルカが入りこみ、数日の間、あちこちで魚を食べる姿が見られました。そして、そんなイルカをひとめ見ようとスマホやカメラを持った人がうろつろつしてました。そんな日の出来事です。」

檸檬噛みYAZAWAは古稀となりにけり 多喰身・デラックス

「檸檬」＝青春という発想の延長線上に、「YAZAWA」が出てくるとは思いませんでした。「YAZAWA」と共に歳をとってきた実感。「古稀となりにけり」に憧れと尊敬と感慨が詰まっています。

同時投句「檸檬酸っぱい死にたき身に酸っぱい」も好き。生きているから酸っぱいのだね。

第229回 2019年11月18日掲載

初冬 はつふゆ

《冬》初冬、仲冬、晩冬、と冬を三つに分けたのはじめの冬のこと。陰暦10月のことでもある。一般的な読みは「しよとつ」だが、俳句に詠む場合は「はつふゆ」と読む場合がほとんどである。

天

初冬や花卉のやうな付箋摘む

あいだほ

「初冬」と書いて「しよとつ」と読むか「はつふゆ」と読むか。俳句は音数というヒントがあるので(ある程度までは)容易に判断ができます。「しよとつ」の音読みの響きは硬くて曆上の用語めいていますが、「はつふゆ」の訓読みは温かみがあります。さらに「初」の一字には、厳しい冬を迎えるという重苦しい感情ではなく、新しい季節出会うささやかな心の華やきが感じとれます。

「初冬や」という強調の後に「花卉」の一語が一句の世界をふわっと優しく展開していきます。何のお花？と思えば、それが書物、資料、書類等に貼られた「付箋」の比喩だと分かる。様々な色合いの「付箋」は「初冬」という季語の持つ、ささやかな明るさに呼应します。

さらに下五に「摘む」という比喩の動詞を置いたのも素

地

鍵盤の一番右の初冬の音

純音

季語「初冬」を音の感覚で表現しようとした作品。「鍵盤の一番右」は最も高い音です。「初」の一字を繊細に感受しているからこそその発想だと思えます。「初冬の音」と言い止めた点も効果的です。

切り紙をひらいてはつふゆの形

木塚夏水

こちらは「はつふゆ」を形で表現したらどうだろうという発想。面白いのは、具体的にどんな形かを述べず「切り紙をひらいて」とのみ表現して、どんな「形」なのかは、読者に委ねたところ。読者の脳裏には様々な「はつふゆの形」が開かれていきます。

初冬のかごめかごめの中に犬

豊田すばる

子どもたちが「かごめかごめ」で遊ぶさまに「初冬」を感じているだけなら物足りないのですが、「くの中に犬」で俄然楽しい光景となります。「犬」を「かごめかごめ」の鬼に見立てて、子どもたちは笑っているのでしょうか。それとも、犬がトコトコと輪の中に入ってきたのかもしれない。心のほっこりする光景にも「初冬」を感じます。

初冬のそろばん教室の匂ひ

紫檀豆蔵

「そろばん教室の匂ひ」に「初冬」を感じるといふ嗅覚の

発想。「そろばん」に接したことがない若い人たちも多いのかもかもしれませんが、「そろばん」世代としては納得の「句ひ」です。手に手に持っている「そろばん」は木製。言われてみると「そろばん」の珠にはかすかな木の匂いがある。温かな手触りのする句いです。

初冬や鳥籠の影美しき

一 阿蘇鷺二

「初冬や」と強調してからの取り合わせ。「影」という映像Ⅱ視覚で「初冬」を表現しました。窓には「初冬」の日差し、窓辺には「鳥籠」。その「影」がくつきりと床に映っている。それを素直に「美しき」と呟く心そのものが詩であるよ、と。

「鳥籠」に鳥がいないと読む人もいるかと思いますが、私はそこには鳥がいて、「鳥籠」の影の中に小さな影が動いているさまを想像しました。心がほっこりと温かくなりました。同時投句「初冬や駝鳥の睫しづかなる」「初冬の時計の中のうなそこめく」も佳句。

街ははつふゆ映画のやうに妻を待つ

今田無明

「妻」との待ち合わせ。お互いに外出している待ち合わせか、今夜は外でお食事しましょうという夫婦のデートか。「街ははつふゆ」という字余りの上五だけで光景が立ち上がります。「映画」を見ようとしているのかと思えば、「のやうに」と比喩に展開。「妻を待つ」自分をそのように感じられるところに、心の華やきがあります。平仮名で「はつふゆ」と表記した点にも心遣いあり。

待ち合わせの喫茶店がない初冬

沢田朱里

「こちらは初冬(しよとつ)」という読みを選択した一句。「待ち合わせの喫茶店」は自分が指定した場所ではないか、と読みました。行ってみたらその店がないという経験はよくありますが、待ち合わせ場所に自ら指定した店がないとなれば少々狼狽えます。下五「初冬(しよとつ)」の響きによつ

て、冬の初めの冷たい風も連想されて。

初冬のドアノブへ我放電す

ときい

「初冬の」で始まる句は多かったのですが、この句は「初冬のドアノブ」と限定する用法です。一年中ドアノブというモノはそこにあるのですが、「初冬のドアノブ」と期間を限定することで、その時期の「ドアノブ(は)」と意味を展開します。助詞「へ」で、ドアノブに何を？と疑問に思った瞬間、「我放電す」と畳みかける表現が巧い。静電気が走る一瞬のバチツという感触を、生々しく追体験させられます。

はつふゆのはちみついよいよこになる

こま

平仮名書きが優しい一句。「はつふゆの」と、これも限定する用法です。何を限定しているかというと「はちみつ」。冬のはじめの光のような蜂蜜の瓶がみえてきました。愉快なのは後半。「いよよは増々の意」「いこじなる」意固地なるの擬人化は、ただの擬人化に終わらず、きちんと映像を作っています。このあたりが、さすがベテランの技術やなくこまさん。

同時投句「初冬の葬儀指輪は殉死する」も、こまさんらしい視点の一句。

蜜漬に琥珀の角度冬はじめ

えむさい

「蜜漬」にしているのは栗か金柑か。百合根も蜜漬にするのとトバンクに書いてありました。「蜜漬」の瓶を眺めているのでしょ。う。「琥珀の角度」という把握そのものが詩です。「琥珀」の色合い「角度」という硬い響きを、下五「冬はじめ」がずしりと受け止めます。

同時投句「袖口を掴んで初冬を漕いで」にも心惹かれました。

はつ冬の交番どれも

神山刻

これも「はつ冬の交番」と限定する用法。「」は「はこがまえ」と読みます。初冬の街を歩く。ふと「交番」って「どれも」だなど気づく。俳句を始めると、こんなことに気づくだけでなんだか得したような気分になります。こんな句に出会つと、「交番」を観察して歩きたくなる。「はつ冬」という表記も明るくて。好きだなあ、こっぴつ句も。

同時投句「ビブスに首とおして初冬の空だ」は口語の魅力。

第230回 2019年12月2日週掲載

落葉

おちば

《冬》木々の葉が散る様子は仲秋頃から見られるが、多くの葉が落ちるのは冬に入ってからであり、冬の到来を感じさせる。今まさに落ちている葉も、地上に落ちている葉も、どちらも指して言つ。

天

前かごに捕へタイヤに轢く落葉

ときい

季語「落葉」の面白さの一つは、落ちる途中も落ちた後も「落葉」と呼ぶ点です。この二つの状態を詠み込んだ句を、今回の「天」に推そうと決めていたのですが、構えていた選句という名のキャッチャーミットに飛び込んだきたのがこの作品でした。上五「前かご」で、ほとんどの読者が自転車か車を思い浮かべるに違いありません。自転車の「前かご」に「捕へ」るものって何？と謎かけをしつつ、「タイヤに轢く」と展開。一体それは？と思ったとたん「落葉」の映像が飛び込んでくる。この語順巧いですね。読み終わつたとたん、映像だけでなく、自転車を漕ぐ足の力、前かごに当たる落葉のかすかな感触、落葉の匂い、轢いた時のカシユリと碎ける音、滑りそつになるタイヤの感触など様々な実感がパツキングされています。

天窓のやうに明るき落葉かな

牟礼あおい

「落葉」を詠む時、落ちている途中なのか落ちてしまった葉なのか分かるように詠みたいと思うのです。そういう意味において、これは明らかに落ちてくる葉ですね。「天窓」の一語が見上げる視線を作ります。「天窓のやうに」という比喩を成功させたのが「明るき」の一語。淡い冬のひかりもうまく表現されています。

ネオンちちち落葉べつたり地に濡れて

一阿蘇鷺二

こちらは落ちた後の葉っぱ。「ネオンちちち」は切れかかった印象。うらぶれた歓楽街でしょうか、暗い駅裏の界限でしょうか。「べつたり地に濡れて」という「落葉」の描写がリアルです。下五切れのない型を用いたことで、我が足元の湿り気をじっと眺めているような効果が生まれました。

火のような猫かしゆかしゆと落葉道

江口小春

「火のような猫」は色合いでしょうか、動きでしょうか、あるいは顔つきや瞳などの表情でしょうか。色々と想像できる比喩です。「かしゆかしゆ」のオノマトペが巧いですね。下五「落葉道」と丁寧に押さえた点も成功しています。

なお落葉と呼ぶるや骨のみとなり

綱長井ハツオ

「落葉」のみを観察した一物仕立て。こういう挑戦も歓迎します。「なお」という時間経過からの状態変化を丁寧に描写しています。中七「呼ぶるや」と切った後に「骨のみとなり」という映像を提示。六五七という独特のリズムになっていますが、内容に見合ったものとなっています。

落葉しかないが城跡なんだとさ

あいだほ

葉という葉が落ちつくした「城跡」なのでしょう。一面「落葉」に埋め尽くされている場所。なんにもないけど「城跡なんだとさ」と呟かれたとたん、その場に特別な気が立ち上がってくるような感覚がします。その感覚を「落葉」の匂いが包み込みます。

落葉落葉たまに落葉をまねた虫

古都ぎんう

この視点も可愛い。「落葉落葉」と重ねている段階では、降り続ける落葉かなとも思っているのですが、「たまに落葉をまねた虫」まで読めば、落葉の降り積もっている映像や落葉の色をした「虫」がありありと見えてきます。「まねた」という擬人化が可愛いね。

産卵管に貫かれたる濡れ落葉

高橋無垢

「産卵管」の一語で、私はコオロギの長いそれを感じ浮かべました。「産卵管」に「貫かれたる」とは？と思ったとたんに出現する「濡れ落葉」の映像。あ、見たことある！という共感の一句です。「濡れ落葉」の色や質感と「産卵管」の鋭く太い感触。実物を見てこそこのリアリティ。率直な描写が成功しました。

二割がた音となりたる落葉かな

小泉ミネルヴァ岩魚

これは落ちてしまった葉っぱ。人が踏むことによって「二割がた音となり」、二割がた壊れてしまっているのです。形のあるものが、音となっていく。季語というモノの変化のとらえ方として、大いなるヒントを頂ける作品です。

猫は目に私は胸に傷、落ち葉

桃猫雪子

この句の「落ち葉」は映像でありつつ、作者の心理を象徴するモノとして描かれています。「猫は目に」傷をもって

いる。「私は胸に」傷をもっている。猫の目をのぞき込む行為は、我が胸の傷を舐める行為でもあるのでしょう。読点のカタチが、小さな傷のようにも感じられて。

金曜の落葉を載せて転車台

すりいぴい

「金曜」は明日から週末だという楽しみと安堵のイメージ。「金曜の落葉」という詩語は豊かな時間と豊かな光景を印象づけます。「金曜日の落葉を載せて」いるのは何？と思つたとたんにでてくるのが「転車台」。電車の向きを変える仕掛けです。

私の住んでいる松山には、路面電車が走っています。道後温泉駅にも「転車台」があり、お客さんを降ろした後、坊っちゃん列車の車体を、運転手さんと車掌さんが手で押して、向きを変えるのです。道後温泉駅の豊かな時間を思わせてくれた一句です。

第231回 2019年12月16日週掲載

たらばがに
鱧場蟹

《冬》蟹に似ているが、実際はヤドカリの仲間で、タラバガ二科の甲殻類。三対の脚とハサミを持ち、とげ状の突起に覆われている。茹でると赤くなるが、茹でる前は濃い紫色で、ハサミや脚の縁は鮮やかな朱黄色をしている。

天

鱧場蟹この一本が水つぽい

一阿蘇鷺二

我が義妹のさつちゃんと蟹を食べにいったことがありますが。調理師のさつちゃんは言います。「タラバよりはズワイがええな」と。私は、蟹であればどれも同じ味に思える程度の舌しかもってないのですが、さつちゃんの舌は「鱧場蟹」の足それぞれの微妙な味の違いが分かるらしく、まさにこの一句のような感想を述べるのです。

「鰯場蟹」がヤドカリの仲間なのだ初めて知った時、さっちゃん舌は凄いい！と思いました。そして「この一本が水つぽい」という食レポの如き吹きで、「鰯場蟹」に一物仕立てを作ってしまう力業に共感の拍手を贈りたい。そして作者「阿蘇鷺」も調理師のような精度の高い舌を持っているに違いない、と確信した次第です。

地

鰯場蟹持てば足みな項垂るる

可笑式

「鰯場蟹」の長い足を描写した句は沢山あったのですが、「持てばゝ項垂るる」という描写が見事です。甲羅の部分を持ち上げる動作まで見えてくるのがまさに写生の効果。「項垂る」という動詞の選択がさすがです。

同時投句「鰯場蟹網走の安飲み屋かな」も地名の力が発揮されています。

人間の爪やはらかし鰯場蟹

高田祥聖

蟹の爪を平然と食べておりますが、「人間の爪」と比較するという発想を持ったことがなかったので、ハッとしました。「人間の爪やはらかし」からの展開が、作者の意図通りの効果をもたらしています。語順は大切です。

鰯場蟹しづかに重機めく深海

ぐ

海底で生きている「鰯場蟹」を詠むという発想もいいですね。「しづかに重機めく」という中七全てが「鰯場蟹」の比喩になっています。「深海」で何かの作業をしている「重機」かのようにゆっくりと動く「鰯場蟹」。生きている時の暗紫色もその印象を強めます。

陸繋のポンコタン島鰯場蟹

星埜徹円

「陸繋」とは、陸繋砂州の形成によって主陸地と陸続きと

化した、過去の島のこと。「ポンコタン島」を調べてみると北海道根室市の港にある小さな島でした。響きが楽しい名前ですが、アイヌ語では「小さな集落」を意味するのだそうです。地名を取り合わせる発想の句も沢山ありましたが、あまり知られてない地名でも充分楽しめますね。

同時投句も固有名詞入り。「鰯場蟹火山は千島でふ名なり」「地を這いし根室の街や鰯場蟹」。

熊の家てふ食堂のタラバカニ

池之端モルト

ネット検索の知識で申し訳ないですが、「クマのことはアイヌ語でキムンカムイ（山の神）」といわれ、アイヌ語名を全部で83種類も有しています」という記述を読んで吃驚しました。そうなると「熊の家」は、熊たちが食べる山の幸川の幸という意味だけでなく、神が施してくれる食堂という意味合いでも読めるか、とも思いました。「家」の一語がそのような印象を醸し出しているのかもしれない。

同時投句「ウトロ漁協婦人部鰯場蟹茹でる」も賑やかでいい。

アイヌ語の鼻音は甘し鰯場蟹

古田秀

「アイヌ語」の唄を目の前で聴いたことがあります。子守歌でしたが、心がゆっくりと引き出され広がっていくような歌でした。「アイヌ語の鼻音は甘し」という描写に心惹かれます。「鰯場蟹」をアイヌ語でどいうのか調べたのですが、カタカナでは表記しにくい響きなのだとしたことだけが分かりました。アイヌの子守歌を歌ってくれた、いつかの彼女の声で発音してもらいたいと思った「鰯場蟹」です。

鰯場蟹女給の尻を目で追ひて

亀田荒太

「鰯場蟹」の漁にたずさわる男たちが集う酒場なのでしょう。「女給」の一語が、ある時代の手触りを思わせます。「女給の尻」や「目で追ひ」という男の表情など、映画のワンシー

ンのような切り取り方が巧い。映画監督の視線で切り取った一句です。

堪察加は果てし陽物蟹工船

山名凌霄

「堪察加」はカムチャッカなのだそう。この場合「陽物」は陰茎、男根を意味すると読めます。カムチャッカ半島の形をこのように比喩する発想にも驚きました。「蟹工船」という季語との取り合わせに様々なイメージが重なってきます。兼題が「蟹工船」ならば、これを天に推したい、鑑賞をさらに書きたいとも思った一句です。

たらば蟹甘いゴルバチョフが恋しい

蟻馬次朗

「たらば蟹」に対して「甘い」と言い切り、対句表現で「ゴルバチョフが恋しい」と畳みかける。時事を含んだこの取り合わせも巧みです。現在のプーチンは、なかなか苦い。北方領土問題も「たらば蟹」漁の行方も拿捕される船も、色々と厳しい。気のいい田舎の親父みたいな「ゴルバチョフ」が恋しくなるよという、これもさすがの一句です。

同時投句「鰯場蟹の口に蠢くなにかある」「たらば蟹はて眼球が見あたらず」も見事な一物仕立てです。

第232回 2020年1月13日週掲載

雪女

ゆきおんな

《冬》「雪女郎」とも呼ばれる、雪国における想像上の妖怪。雪国という風土ならではの暮らしに根差した幻想であろう。

天

雪女の気配に雲の香が強い

酒井おかわり

歳時記で「雪女」という季語に出会う。それが天文に分類されていることに驚く。これは俳人アルアルというやつ

でしょう。擬人化された季語には、春の佐保姫、秋の竜田姫などがありますが、「雪女」はもつと人間との接触が濃い印象があります。伝説や怪談によって、生身の人間めいた「雪女」が様々に想像されるからでしょう。

今回は、できるだけ天文の季語であることを押さえた句をいただごととキャッチャーミットを構えておりましたら、この句が飛び込んできました。

今日は「雪女の気配」がするぞ。「雪女」に遭遇しそうな大雪になりそうな、そんな気配がするぞ。雪を呼ぶ「雪の香」がこんなに濃く匂っているものな。

このように書かれてみると、「雪女」というのは「気配」に違いないと思います。人間の側の想念が「雪女」を見せる、見てしまつ。そんな「気配」なのでしよう。後半を「雲の香が強い」と体験的な措辞で押さえることで、「気配」という曖昧な印象が詩の言葉として定着します。そのあたりは十分考慮した上での一句に違いないと確信します。

地

雪女の息か神鏡砕きしは

RUSTY

兼題「竜田姫」の時に、こんな句がありました。「神鏡は昏い太陽竜田姫 ちゃうりん」竜田姫に対して「神鏡は昏い太陽」を取り合わせた点が巧い一句でしたが、「雪女」ならば「神鏡砕きしは」となるのかと納得してしまいました。神社の神霊として祀つてある鏡か、ご神体の前に置く鏡か。「神鏡」が砕けていることに驚いたとたん、ハツとするのでしよう。昨夜の雪の激しさ。これは「雪女の息」が砕いたときかと思えないぞ、と。「くさくさ」と断定しない語り口が、巧い作品です。

あれは雪女だったと筆談す

あみま

雪の中から助け出された人物でしようか。「あれは雪女だった」と書き付けられる、震えた文字。恐ろしさのあまり口がきけなくなっているのか、声を奪われたのか。様々

な想像が交錯します。

祖父も知らぬ祖母の生ひたち雪女 ももたもも

気がついてみれば、うちの家系にも分らないことが色々ある、という発想でしようか。「祖父も知らぬ祖母の生ひたち」という措辞にどんな季語を取り合わせるかによって、ほのぼのとした句にも恐ろしい句にもなる。「雪女」は、祖母の生ひ立ちの答えのように下五にひっそりと座っています。

逆立てる水の鱗や雪女

ウロ

凍りかけている湖を思いました。岸に近いところは凍り、湖の中心あたりは「逆立てる水の鱗」のように吹雪いているのではないかと。上五中七の比喩の鮮度が魅力。下五「雪女」という季語が出現したとたん、読者である私たちも「水の鱗」の向こうに冷たい影を見たかのような心持ちになります。

雪おんな致死量ほどの塩を買う

かもん丸茶

この発想にも驚きました。言われてみれば、雪や氷を溶かす融雪剤は塩化カルシウム。「雪おんな」にとつて「塩」は死なのですね。「致死量ほどの塩を買う」この雪女に「体な」があつたのでしよう。ここから始まる「雪おんな」の物語。

六軒の雪女しか居ない村

ざつこ

廃屋が「六軒」ある光景から、このような発想に至ったのかもしれません。この「六軒」は「雪女」の住んでいる集落。「雪女しか居ない」という措辞が、寂れた「村」の様子を想像させます。冷え冷えと昏い村なのでしよう。「六軒」という数詞が、妙なりアリティとなつて。

あれは雪女のコロニーではないか こじまはじめ

先ほどの「六軒の雪女しか居ない村」という発想と方向は同じですが、「雪女のコロニー」という措辞にさらに吃驚。「コロニー」にはいくつかの意味がありますが、「一地域をある程度の期間占有する同一種または数種の生物の集まり」という生物学の意味にとらえるのが、よいかと思います。吹雪の中に見つけた集落は「雪女のコロニー」のように見える。まるで安部公房の世界に足を踏み入れたかのような戦慄が走ります。

子の重さほどの石なり雪女

古田秀

「雪女」と知らず「雪女」と出会い、「子」をおぶつてくれと哀願されたのかもしれません。気がついてみれば、「子の重さほどの石」を抱いて雪の中を彷徨していた。そんな怪談を一語聞かされたような心持ちになりました。

雪女泣くから子の首を絞めた あるきしちはる

我が子殺しを犯してしまった女の供述のようでもあります。だってあの夜は「雪女」がしきりに泣いてたんです。だから私は「子の首を絞めた」のです、と。朝になつてみれば、私は我が子の骸を抱きしめて、ここに座っていたのです、と。

ゆきをんな去つてこけしのやうな死者 今田無明

「ゆきをんな去つて」とは、吹雪の去つた朝でしようか。そこにあるのは「こけしのやうな死者」であるという比喩の、なんと恐ろしく生々しいことか。「こけし」のように真っ直ぐに硬い死体。「こけし」のように表情なく見開かれた目。比喩の力に圧倒される作品です。

今回の兼題「雪女」は、虚構の世界に生々しく息づいている季語でした。季語の力が生み出した作品の数々に、心かき乱された金曜日。力作、ありがとございました。

とうみん 冬眠

《冬》体温が外気温に左右される変温動物は、冬の低温期になると代謝やエネルギー消費が少なくなり、眠ったような状態になる。また、一部の哺乳類にも、冬眠するものやそれに近い状態になるものがある。

天

熊胆のごとき太陽冬眠す

まごちふる

季語「冬眠」は動物の季語。ゆえにどうしても「冬眠の○○」と蛙や蛇などの生き物を書くことになりがちです。それはそれで全く良いのですが、せっかく皆で挑むのですから、季語「冬眠」とストレートに向き合っている句を選びたいと考えておりました。

さて、掲出句の「熊胆」とは「ゆうたん」と読みます。文字通り熊の胆嚢。漢方薬です。中屋彦十郎薬局HPには、以下のような解説がありました。【第三類医薬品、熊胆は「薬性論」に「小児の五疳を主治し、虫を殺し、悪瘡を治す」とあり、唐本注、神農本草経にも収載されている。冬期間にとれた熊の胆は匂いがしない。射殺したクマから血液や脂肪の夾雑物が入らないように胆嚢を取り出し、これを冬期間陰干しにすると力チカチに固まる。これが生薬の熊胆で、不透明黒色の固い塊である。多くは卵球形である。一種の香氣があり、味はきわめて苦い。】

この文章を読めば「熊胆のごとき太陽」がどのような太陽か、想像がつかます。不透明で黒色の塊、卵球形の太陽です。生き物たちが「冬眠」する小さな穴から見える太陽はこんな印象なのでしょうか。あるいは、厳寒の暗い雲の向こうにある太陽を作者の心がこのように感じ取ったのかもしれません。

「熊」の一字と「冬眠」が良い意味で響き合いますし、「熊胆のごとき太陽」の比喩は冬という季節の感覚にも合致し

ます。一種の香氣があつて、味はきわめて苦い。「冬眠」する生き物たちにとって、「太陽」とはまさにそういうものではないかと、この比喩の力に脱帽します。

地

冬眠の亀呼んでみる日課かな

鹿本てん点

「冬眠の亀」に声をかけるという「日課」は、手持ちぶさたな日々とも、春を待つ心とも読めます。水槽の「亀」が、公園の池の「亀」か。「日課かな」の詠歎がのんびりとゆったりと。

「理事長」と子らが呼ぶ亀冬眠す

宗貞

なんてったって、このニックネームが面白い。理科室や教室で飼っている「亀」でしょうか。「亀」の顔が、学園の理事長に似てたのかもしれない。「理事長が冬眠しちゃったんだよね」なんて話してる子どもたちを思うだけで、可愛くて可らしい。下五「冬眠す」も飄々たる語りです。

冬眠の蛙と横の横の蛇

あみま

「冬眠の○○」と生き物の名前を入れると季重なりになるのでは、と躊躇した人たちも多かったようですが、「冬眠」という季語の特質として、「冬眠の蛙」のような使い方は当然でできます。が、それを逆手にとって二匹も入れてくるとは、天晴れです！

冬眠の土の中には、蛙の穴もあり、その「横の横」の穴では「蛇」もグルグルと己が身を巻いて眠っているに違いありません。俳句における工夫というのは、幾らでも有るのだなあと愉快になった一句です。

山割れば曼陀羅の如冬眠図

野々りんどう

こちらも地中を想像しているわけですが、「山割れば」と

いう発想がダイナミック。中七「曼茶羅の如」は時折見る比喩ですが、まさか山を真つ二つに割った「冬眠図」だなんて思いもしませんでした。この句を誰か、幻想的な日本画にしてくれないかと、そんな妄想も抱きました。

永仁の壺の形に冬眠す

森二平

「冬眠」している獣を、勾玉に喩えたり、月に喩えたりする発想はありましたが、「永仁の壺」が出てくるとは思わなかった！

以下、ネット事典に載っている「永仁の壺事件」について。【1959年（昭和34年）、「永仁二年」（1294年）の銘をもつ瓶子が、鎌倉時代の古瀬戸の傑作であるとして国の重要文化財に指定された。しかしその後からその瓶子は贋作ではないかという疑惑がもたれていた。この瓶子は結局、2年後に重要文化財の指定を解除されることとなり、重文指定を推薦していた文部技官が引責辞任をするなど、美術史学界、古美術界、文化財保護行政を巻き込むスキャンダルとなった。件の瓶子は実は陶芸家の加藤唐九郎の現代の作であったということで決着したが、事件の真相についてはなお謎の部分が残されているといわれる。】

「永仁の壺」の形をして「冬眠」しているのは、蛇だろうか蛙だろうか。謎の残る贋作事件も、そのまま冬眠してしまったかのような今のところの決着。「冬眠」が覚める時、この「永仁の壺の形」の生き物は、どんな形となって地上に出てくるのでしょうか。

冬眠の蛙は鶏へ放りやる

一阿蘇鷺二

裏庭の畑を耕しているのでしょう。鍬の先に転がりてきたのは、「冬眠の蛙」。それをポイと放し飼いの「鶏」の方へ投げるのです。下五「放りやる」は繰り返されている日常の動作を思わせます。季語「冬眠」に対して、二つの生き物を出現させ、実景を描写しつつ、破綻してない。見事な底力です。

蛇かなし真珠のやうに冬眠す

RUSTY

いきなり「蛇かなし」！と思った瞬間にでてくる「真珠」の一語にハッとします。感情語「かなし」が、「蛇」と「真珠」を結びつける。そこに美しい言葉の火花が飛び散ります。さらに「真珠のやうに」と比喩へ展開。その比喩が「冬眠す」に対するものと分かった時の詩的興奮。青白く眠る蛇の肌。「かなし」という感情は「蛇」にも「真珠」にも「冬眠」にもひたひたと及んでいくような静かな迫力があります。

冬眠のひかりうしなふまへのいろ

ぐ

「冬眠」する生き物の、例えば蛇の鱗の「ひかり」なのでしょつか。眠りはじめる「まへ」の眼の「ひかり」でしよつかあるいは「冬眠」という行為そのものを指すのでしよつか。さまざまな「ひかり」と「まへのいろ」を想像させられて、この句の周辺を、うっとり彷徨っているかのような持ちちです。

灯が曇るこれが冬眠なのだろう

神山刻

「冬眠」する生き物になりきっての呟きでしよつか。まるで自分が水槽の亀になったような気がしてきました。あらあ？ なんだか「灯」が曇っているように見えるよ。眼の前に膜があるような。そうか「これが冬眠」というものなのだろう、と呟きつつ眠りに入る亀。そんなことを思いつつも、虚の「冬眠」に入っていく、作者自身の心のようにも思えてきて。

同時投句「冬眠の蜜のかかつてゆく体」にも心惹かれました。

冬眠は春のスウプを煮るやうに

あるきしちはる

「冬眠」をしている生き物の気持ちになって詠む句もあれば、「冬眠」とはいかなるものかについて、詩的定義する発想もあります。「春のスウプ」をゆっくりゆくり「煮る」

よつに、ゆっくりゆくり春を待つ。それが「冬眠」という行為なのです、きつと。

冬眠やわたしを忘れぬための旗

綿井びよう

「冬眠や」と強調し、カットを切り替えた後の「わたしを忘れぬための旗」とは一体何でしよつか。この「冬眠」とは、虚実のはざまに漂うものなのだろうと感じます。「わたし」の存在を皆が忘れないように、いや私自身が「わたし」という存在を見失わないように立てた小さな「旗」。今この「旗」は、とろんと冬日に垂れているのでしよつか。

第234回 2020年2月10日週掲載

寒椿

かんづばき

《冬》単に「椿」というと春の季語だが、「寒椿」は冬季に咲くものを一般的に指す。椿には多くの品種があり、花の咲く時期も初冬から晩春まで、多様である。

天

寒椿雪の温度となつてゐる

佐藤直哉

山茶花の変種のカンツバキもあるようですが、季語としての「寒椿」は冬季に咲く椿という定義になります。

意欲的な句が寄せられ、感覚的に好きな作品も沢山あったのですが、「寒椿ではなく、むしろ椿の句として仕上げたほうがよいのではないか」と思える句も少なくなかったように感じます。ならば寒椿の「寒」の一字を保証している句を推したいと、キャッチャーミットを構え直した上で、この一句を推すことにしました。

「雪」との季重なりですが、上五「寒椿」が主たる季語。雪の中の「寒椿」は赤に違いありません。「寒椿」にかぶさるように積もっている雪。もつすでにこの「寒椿」は「雪」の温度となつてゐる」に違いない、という気づきに詩があ

ります。

つまり、寒椿に雪が降っている光景を描写するのではなく、「雪の温度となつてゐる」という措辞によって、伝えたい映像を読者の脳内にて再生させる。ここに新しい試みがあるのです。しかも視覚だけでなく触覚としての冷たさもパッキング。読み下した瞬間に、この「寒椿」に触れようと手をのばす自分を感じました。俳句は、まだまだ色んなことができるのだという刺激をもらった作品です。

地

真つ白な日本の隅に寒椿

すりいぴい

「真つ白な日本」を雪と読むこともできるのですが、日本という国のイメージと受け止めました。和紙、白壁、日の丸の国旗等の印象をもつ人もいるかもしれませんがね。その「日本の隅」に凛々と咲く「寒椿」。日本人の心根のようにも感じられる「寒椿」です。

寒椿口から産んだような赤

高橋無垢

「寒椿」が赤いという句は山ほど届きましたが、中七の比喩にハッとさせられます。「口」の中の赤さを思わせつつ、子宮の赤も連想させます。「口から産んだような」という比喩の鮮度におのきます。まるで「己の口が椿を産み落としたかのような生臭い恍惚感」。

寒椿知るや海城だった過去

GONZA

海から切り立つた崖の上に群生する「寒椿」を思いました。かつてここは「海城」であったという歴史の地。「寒椿知るや」の「や」は、知っているだろう、いや知らないに違いない、という意味に取りました。下五「過去」のあとの余白に波音が響いてくるかのような作品。

ろんろんと美しき神水寒椿

にゃん

「ろんろん」は湧き上がる「神水」のオノマトペ。「神水」に対しての「美しき」が気になる読者もいるとは思いますが、「神水」の透明感や冷たさを何かの言葉で書きたかったのだらうと、好意的に解釈しました。「寒椿」の二つは「美しき神水」に落ち、冷たい水面を揺らすのだらうなど。

鈴の音の止まぬは怖し寒椿

RUSTY

「鈴の音」は神社の鈴かもしれないし、お遍路の杖の鈴かもしれない。が、それらが止むことなく、時に強く、時に静かに鳴り続けていたとしたら……、恐怖がじわじわと押し寄せてくるに違いありません。「怖し」と言い切った後、身じろぎもしない「寒椿」も又、じわじわと怖ろしい存在に変わっていきます。

寒椿に空ごっこそり落ちにけり

ゆうが

リズムが気になったのですが、全部足せば確かに十七音です。敢えて字余りにして中七を「空はごっこそり」「空のごっこそり」「空ごっこそり」と等とすることも考えられるのですが、ともかくもこの発想にギョッとさせられたのです。

「寒椿に」の「に」は、寒椿によって空が落ちるという意味になります。「寒椿」の激しい咲きぶりによって、寒の「空」が「ごっこそり」落ちたというのでしょうか。雪催の昏い空が不吉と不条理が「寒椿」をますます鮮やかにみせる、なんだか怖ろしい作品です。

寒椿井戸はあたたかな暗がり

よだか

五音の季語「寒椿」に対して十二音のフレーズを取り合わせてはいますが、中七下五が破調です。ぎくしゃくしたリズムが気にはなるのですが、内容に見合ったりリズムではあります。

「寒椿」の木は「井戸」の端にあるのでしょうか。井戸の蓋

の隙間から、井戸の底へと続く「暗がり」が見えます。「寒椿」の冷たさに対する、井戸の「暗がり」を「あたたかな」と感じ取ることができるのが、この作家独特の詩的センサーです。

寒椿臉を昏く鶏ねむる

きゆうもん@木ノ芽

「鶏」の「臉」に着目した句はあつたかとは思いますが、「寒椿」の冷たさ、鮮やかさとの対比に惹かれます。「鶏」の瞬膜を「臉を昏く」と表現しているのかもしれない。科学と詩のはざまに切り取った「鶏」の表情。まるで上質な日本画を眺めているような気持ちにさせられます。

寒椿信仰は血のなかに凍る

ほろろ。

「信仰」というのはどう捉えればよいのでしょうか。愛であり願いであり希望でありつつ、我が「血」の中に「凍る」こともある。「寒椿」の前でひたすらに祈るしかないのか。中七下五のフレーズは、まるで聖書の二節のような警句でもあります。

しくしく込み上げるこれが怒りか寒椿

ぐ

上五の音数を大きく余らせています。「しくしく込み上げる」の9音が「怒り」の描写だと分かった瞬間、「寒椿」が強い光を発するかのような作品。赤い椿だと思っか、白い椿を感じ取るか。読者はそれぞれ「しくしく」というオノマトペへの心理的生々しさに囚われていくのです。

第235回 2020年2月24日週掲載

むぎふみ
麦踏

《春》麦が伸びすぎたり霜で根が浮きあがるのを防ぎ、根張りを良くするために、青く伸びた麦を踏みつけていく。かつては人の足で踏んでいたが、今では機械で行われることが多い。

天

麦踏や風はころころ地の起伏

M・李子

遠い山々に残る雪、まだ冷たい早春の風の中、黙々と麦を踏む姿は日本の原風景でもあります。昨今は手押しローラーが使われますが、それもまた今どきの「麦踏」という季語の現場です。

「麦踏や」と強調した切れの後にでくる「風」は、浅春の冷たさを体感させます。「ころころ」というオノマトペは季節の感触でありつつ、短い麦の芽が風に揺れる様子も思わせります。中七から一気に遠景が広がる構成、巧いですね。

さらに誉めたいのは下五のおさめ方。広々と続く「地の起伏」に沿って、風は「ころころ」と転がり続けます。麦の芽は、次々に風を手渡すように揺れていくのです。「地の起伏」をはるばると見渡したのちに読者の視線は再び「麦踏」の人物に戻っていくのです。

地

麦踏みと呼ばれて麦を踏み戻る

あいだほ

「歩み来し人麦踏をはじめけり 高野素十」という名句がありますが、その後を詠んだかのような一句です。作業としての「麦踏」が、「踏み戻る」という別の意味の動作に変わる面白さ。シンプルな語り口もまた、素十の句の味わいに重なります。

麦踏に余る手が道指し示す

稗田鈴二郎

こちらは「大根引き大根で道を教へけり 小林一茶」を下敷きとした一句でしょうか。「麦踏」で必要なのは足。「余る手」は、道を尋ねている人に「道指し示す」ことができるのです。無駄な言葉が一切ない、吟味がしっかりと出ている作品です。

吹きわたる風に山の名麦を踏む

板柿せつか

「風に山の名」とは、筑波風、浅間風、伊吹風のような名前なのでしよう。麦踏は、春寒の頃の作業。「吹きわたる風」がどんな風であるのかは、季語がありありと伝えてくれます。「風」という言葉があれば一見不要に見える複合動詞「吹きわたる」は、下五「麦を踏む」人物へと吹き降ろしていく実感を補填します。

麦踏むや仏の手めく里の底

一阿蘇鷲二

「仏の手めく里」は盆地でしよう。さらにその「底」の麦畑にて、麦踏の作業をする人が小さく見えているのか。「麦踏」をする人物自身が、ここは「仏の手めく里の底」だと認識しつつ、作業をしているのかもしれない。仏に守られているかのような里、敬虔な人々が暮らす里を思わせる措辞です。

陵へ黙礼次の麦を踏む

星埜黴円

「^{みでせ}陵」は大きな丘の意味もありますが、天皇や皇后の墓を指すのでしよう。太古よりこの地にある「陵」へ向かって「黙礼」する。朝の作業前かとも思ったのですが、「次の麦」とありますので、「列を踏み終え、向きを変えて次の麦を踏む」動作に移るのでしよう。陵に尻を向けることを詫げる、そういう思いが読み取れました。

山かげの二畝の麦まだ踏めず

にゃん

日の当たる畝の方が麦の育ちもよいのでしようが、作業としては日陰より日向のほうが有難い。「山かげの二畝の麦」がまだ踏めてないなあ、という呟きにささやかなリアリティがあります。

麦踏やはじめとさいごだけ真面目

花紋

お手伝いをさせられている子でしようか。アルバイトかもしれませんがね。「はじめとさいごだけ真面目」という正直な台詞が、ちよつと笑えます。「麦踏」という作業ならではの正直さでもあり。

遠山に雨の柱や麦を踏む

上倉すず女

麦畑から見晴るかす「遠山」には「雨の柱」が見えているのです。あの雨がやがてこちらにやってくるに違いないと、横目で眺めながら「麦を踏む」作業を続けているのです。「雨の柱」という比喩表現、「や」の切れ字の効果など、よく考えられている作品です。

麦踏に良き足持ちて読書好き

くらげを

「麦踏に良き足」という表現が飄々として愉快です。見事な大足を思いました。さらにたたみ掛けての「読書好き」。晴れば黙々と麦を踏み、雨が降れば悠々と本を楽しむ。まさに晴耕雨読の生活が見えてきます。

麦踏んで風呂に魚の目ふやけけり

トボル

精出して「麦踏」をした夜の「風呂」です。ちと痛いと思えば、「魚の目」が育っている。その「魚の目」がふやけてしまつほどの長湯で、疲れを癒したんですね。「ふやけけり」がいかにも惚けた味わいの一句です。

俳句ポスト365 選者

夏井いつき プロフィール

昭和32年生まれ。松山市在住。8年間の中学校国語教諭の後、俳人へ転身。「第8回俳壇賞」受賞。俳句集団「いつき組」組長。創作活動に加え、俳句の授業「句会ライブ」、「俳句甲子園」の創設にも携わるなど幅広く活動中。TBS系『プレバト!!』俳句コーナー出演などテレビラジオでも活躍。松山市公式俳句サイト「俳句ポスト365」、朝日新聞愛媛俳壇、愛媛新聞日曜版小学生俳句欄、各選者。15年より初代俳都松山大使。18年第44回放送文化基金賞（個人）。19年テレビ愛媛賞、メタセコイア賞。句集『伊月集 龍』（朝日出版社）、『おうちde俳句』（朝日出版社）、『俳句ことはじめ』（ナツメ社）、『子規365日』（朝日新聞出版）、『季語手帖365日』（レゾンクリエイト）など著書多数。